022967-001-3

108-139

日本地理　（中学教程）

中等学科教授法研究会／編

M31

ADB-0903

108
2
139

文學士喜田貞吉校

中學教程 日本地理全

中等學科教授法研究會藏

中學教程

日本地理

中等學科教授法研究會編

第一篇 序說

第一章 地理學の分科

吾人は地球の表面に生息し、空氣を呼吸し、水を飲み、動植物よりて衣食するのなれば、必ず此等の事物を講究せざるべからず。而して地理學は、人類の生息せる、此の地球を論じ、吾人の生活に關して、地球の表面なる諸般の狀態を說明する者なれば、地理學の講究は、吾人に於て最缺くべからざる要務なり。地理學を分ちて三科となす。

第一 天文地理 天文地理は、地球の形狀、廣袤、運動、四季、晝夜の

108
2
139

中學教程

日本地理

中等學科教授法研究會編

第一篇　序說

第一章　地理學の分科

吾人は地球の表面に生息し、空氣を呼吸し、水を飲み、動植物よりて衣食するものなれば、必ず此等の事物を講究せざるべからず。而して地理學は、人類の生息せる、此の地球を論じ、吾人の生活に關して、地球の表面なる諸般の狀態を說明する者なれば、地理學の講究は、吾人に於て最缺くべからざる要務なり。

地理學を分ちて三科となす。

第一　天文地理　天文地理は、地球の形狀、廣袤、運動、四季、晝夜の

變化等を論ずるものとす。

第二　地文地理　地文地理は、海陸自然の區別、氣候、風雨、及び、動、植、鑛の播布等を論ずるものとす。

第三　人文地理　人文地理は、各國の位置、境界、人種、政體、教育、宗教、風俗、及び、産物、貿易等を論ずるものとす。

第二章　天文地理

第一節　地球の形狀及び廣袤

廣濶なる地より出でゝ四方を觀望せば、地球の極る所、天空と相接して、其の表面平坦なるが如し。然りと雖、地球ハ、球の如き圓體なるものなれば、其の表面は彎曲せり。只、其の體甚だ大にして、傾斜の割合小なるを以て、平面の如くに見ゆるのみ。

今、地球の圓體なるを認めんと欲せば、海岸より立ちて船の港を立去るを見るべし。船の進行するに隨ひて、始めは、船體の下部より次第に沒して、終には、唯、檣頭のみ見ゆるに至る。又、月蝕を見よ、月面に現はるゝ影は、地球の影なり、而して、それは、常に必ず圓體なるべし。

是等の例によりて、地球は、圓體なることを知るべし。然れども、地球は、眞の圓體にあらず、南北に於て、稍、扁平なる楕圓體なり。即ち、東西の直徑は、七千九百二十五哩二分の一、南北の直徑は、七千八百九十九哩なり。而して其の表面の面積は、大約一億九千七百萬方哩あり。

第二節　經度、緯度

地球上各處の位置を定めんが爲め、假に、其の表面に縱横の線を畫き、縱なるを經線と稱し、横なるを緯線と稱す。經線は、南北の兩極

に達する線にして、其の數三百六十あり、緯線は、東西に地球を一周する線にして、其の數百七十九あり。

經線の長は、皆相等しと雖、緯線は、中央の赤道と稱する線、最も大にして、之より兩極に近づくに從ひ漸く短し。　經線、緯線、共に其の兩線の間を度と稱し、度を六十分して分と云ひ、分を六十分して秒と云ふ。　此の度、分、秒の長は、緯度に於ては、各處相等しく、經度にありては、兩極に近づくに從ひて、漸く短く、極點に至りて、遂に零と爲る。」

經度を算するには、英國グリニッチ天文臺に當る線を零度とし、これより東西に算して、東經幾度西經幾度と稱し、各、八十度に至りて止む。　又、緯度を算するには、赤道を零度とし、これより南北に算して、南緯幾度北緯幾度と稱し、各、九十度に至りて止む。

第三節　五帶

赤道より、南北共に二十三度半の處に、各、一線を畫き、之を回歸線と稱す。　南回歸線は、又、冬至線と稱し、北回歸線は、又、夏至線と稱す。

此の二至線の間の地は、溫度最も高し、故に此の部を熱帶と稱す。

又、赤道より、南北共に六十六度半、即ち、兩極より、二十三度半の處に、各、一線を畫き、南に在るを南極線と稱し、北に在るを北極線と稱す。

此の兩極線と兩回歸線との間の地は、氣候溫暖なり、故に、此の部を溫帶と稱す。　兩極線より、兩極に至る間の地は、溫度最も低し、故に、此の部を寒帶と稱す。　溫帶と寒帶とは、共に、南北の二帶あり。　此等諸帶を合せて、五帶と稱す。

第二篇　地文地理

地球の表面は、水と陸とより成り、水は、殆ど總面積の四分の三、即ち、一億四千四百萬方哩を占め、陸は、水の四分の一、即ち、五千三百萬哩

を占む。而して陸は、概ね二大彙を爲す。其の大なるを東大陸と稱し、其の小なるを西大陸と稱す。東大陸は、亞細亞、歐羅巴、亞非利加の三大洲より成り、西大陸は、南亞米利加、北亞米利加の二大洲より成る。尙ほこれに阿西亞尼亞洲を加へて、六大洲と云ふ。其の中、最も大なるは、亞細亞にして、日本帝國は、此の中にあり。最も小なるは、阿西亞尼亞なり。水には、海水陸水の別あり。海水を別ちて五と爲す。今、面積の大小によりて、順次に其の名を擧ぐれば、太平洋、太西洋、印度洋、北氷洋、南氷洋、即ち是なり。水陸ともに種々の名稱あり。即ち、陸には、大陸、半島、岬、地峽、山、谷、平原、森林、沙漠等あり。水には、大洋、海、海峽、灣、河川、湖沼等あり。是皆、其の形狀の大小により て、名づけたるなり。

今、左に章を逐うて、日本帝國に關する地文地理を、畧說すべし。

第一章　位置

我大日本帝國は、太平洋の西北隅に位して、亞細亞洲の東岸に羅列せる島國なり。其の群島、東北より、斜に西南に延きて、北緯二十一度五十三分(臺灣南岬)より、同五十度五十六分(千島亞賴度島)に達し、東經百十九度十九分(臺灣澎湖島)より、同百五十六度三十二分(千島占守島)に至る。

第二章　境域

我國は、四面皆海にして、北にオホツク海あり、西に日本海あり、西南にあるを支那海といひ、東南にある大なる海を太平洋といふ。故に、隣國と直に土壤を接する處無しと雖、其の相距ること近きものは、北方に、宗谷海峽を隔つる樺太島、及び、久留里海峽を隔つる堪察加半島あり、西方には、朝鮮ありて、我對馬島と一葦帶水なる朝鮮海

峡を隔てゝ相望み、西南には臺灣の一大島、臺灣海峡を挾みて、西の方支那本部に對し、南は、フィリッピン群島と相隣る。

第三章　廣袤

我國は、五個の大島と無數の島嶼とより成れり。五個の大島は、本州、北海道、九州、四國、及び、臺灣にして、屬島の重なるものは、千島(三十二島)、琉球(五十五島)、佐渡、隱岐、淡路、壹岐、對馬、小笠原(二十島)、及び澎湖島、紅頭嶼等なり。

五大島の中、本州は最大にして、群島の中央に位す、長五百里、其の幅廣き處にて、百里に近し。之に次ぐを北海道とす、廣袤各、八十里あり。次ぎは、九州及び臺灣にして、各島の幅員、大約、北海道の半に當る。四國は、最小なるものにして、其の幅員、九州の半に及ばず。今、五大島及び千島、琉球の面積を左に掲ぐ。

本州(佐渡、隱岐、淡路、小笠原島共)	一四、六九〇、〇〇〇方里
北海道	五、〇六二、〇〇〇方里
九州(壹岐、對馬共)	二、六七一、〇〇〇方里
臺灣	二、五一四、〇〇〇方里
四國	一、一八〇、〇〇〇方里
千島(三十二島)	一、〇三三、〇〇〇方里
琉球(五十五島)	一五七、〇〇〇方里

全國の總面積は、大約、二萬七千三百方里あり。之を外國に比すれば、大約、支那は、我が二十六倍に當り、朝鮮は、我が二分の一に當り、英國は、その屬地を合せて五十七倍、露西亞は、五十三倍、佛、獨の兩國は、各、一倍餘、北米合衆國は、二十倍の面積を有するなり。

第四章　海岸

我國の海岸は、岬角、港灣甚だ多くして、海岸線の全長、大約、七千五百里に亘れり。殊に、太平洋岸は、其の屈曲甚だしくして、日本海岸に比すれば、其の長二倍餘あり。今、五大島の海灣岬角等に就きて、最も著きものを左に掲ぐ。

北海道の海岸。北海道の海岸は、北に宗谷岬あり、宗谷海峽を隔てゝ、樺太島に對し、南に襟裳岬あり、東に根室灣あり、根室灣の左右には、長く知床岬と納沙布岬との突出せるあり。渡島半島は、火山灣を抱き、其の南は函館灣にして、南を津輕海峽といふ。

本州の海岸。本州の海岸は、北端に青森灣ありて、斗南半島と津輕山嘴とに圍まれ、太平洋の沿岸には、牡鹿半島長く延びて、仙臺灣を抱き、房總半島突出して、東京灣を擁し、伊豆半島は、東に相摸灣、西に駿河灣を控え、これより西は、遠州灘を經て、伊勢海の深く北方に灣入するあり、知多半島は、其の右に斗出して、北灣と衣浦とを分かつ、

紀伊と四國との間は、紀伊水道にして、北に大阪灣あり、これより以西は、瀨戸内海にして、沿岸の出入殊に甚だし、然りと雖も、皆狹少にして、稍、大なるは、唯兒島灣、廣島灣あるのみ。日本海の海岸は、屈曲甚だ少く、男鹿半島、能登半島、富山灣、若狹灣、島根半島等の外は、著きもの無し。

九州の海岸。九州の海岸は、西部に於て、屈曲最も多く、肥前の一國、海中に錯出して有明灘を圍み、松浦、島原、彼杵の諸半島、唐津、伊萬里、大村の諸灣あり、南には、薩摩、大隅の二國斗出して、鹿兒島灣を抱き、東北には、豐後半島長く延びて、大分灣を成し、佐賀の關は、速吸海峽を隔てゝ、四國と相對し、門司の港は、早鞆海峽を隔てゝ、中國と相望む、其の西に福岡灣あり。

四國の海岸。四國の海岸は、北に梶取岬と箱崎とありて、燧灘を擁し、南に、室戸岬と蹉跎岬とありて、土佐灣を圍む、佐田岬は、西に斗

出して九州に向かふ、其の南に宇和島灣あり。

臺灣の海岸。　臺灣の海岸は、屈曲甚だ鮮し。　されど、北部には、富貴角の東に、基隆灣あり、其の西に、淡水灣あり、東北端には、北斗岬、三貂角等あり、南端には、南岬斗出して其の西に一の入海を成せり、これを南灣と云ふ。　此の外、東海岸に、蘇澳灣、西南海岸に打狗灣等あり。

第五章　山脈

我國の山脈は、樺太山系、支那山系の二大山脈系より成れり。　樺太山系は、大略、南北の方向を取るものにして、北東の樺太島より、南に走り、北海道を經て、本州に入り、南にすゝみて、中央部に至る。　支那山系は、支那大陸より起り、概ね、西南より、東北の方向を取りて進み、九州の西部より、中國、四國を過ぎ、東北に走り、本州の中央部に達して、樺太山系と相會合す。　此の兩大山脈系の會合點は、飛騨、信濃、甲斐地方にして、即ち、我が國第一の高地なり。　今、茲に主要なる山脈を掲ぐ。

- 樺太山系
  - 蝦夷山脈、北上山脈、阿武隈山脈、
  - 關東山脈、美濃、飛騨山脈、寶達山脈、
  - 鈴鹿山脈、木曾山脈、笠置山脈、
  - 葛城山脈、
- 支那山系
  - 九州山脈、四國山脈、中國山脈、
  - 紀伊山脈、赤石山脈、臺灣山脈、

蝦夷山脈は、樺太島より來りて、天鹽、北見の境を南走し、石狩の境に至りて、千島帶火山脈と交叉し、十勝、日高の境を走りて、襟裳岬に至る。

北上山脈は、陸奥の馬淵川の南岸に起り、南走して牡鹿半島に終る。

阿武隈山脈は、北上山脈の南部にして、磐城より常陸に入り、土浦の近傍に盡く。

關東山脈は、武藏、相摸、甲斐三國の境上に亘る。

美濃、飛騨山脈は、越中、越後の間より起りて、美濃、飛騨の東部に連る。

寶達山脈は、能登半島より起り、加賀、越中の境を經、美濃、越前の境に出でゝ、鈴鹿山脈に連る。

鈴鹿山脈は、伊勢、近江の間に亘りて、大和の東境を劃る。

木曾山脈は、信濃の中央に起りて、其の西南に亘る。

笠置山脈は、山城の東南部より起り、大和に入りて、吉野川の岸に終る。

葛城山脈は、山城の西南部より起り、大和、河内の境を經て、紀伊に入る。

九州山脈は、南北の二脈に分かれ、南脈ハ肥後の西南より起り、日向

の國境を過ぎ、豐後の東部に入りて、佐賀、關に至り、北脈は、肥前の北部より、筑前、豐前を經て、中國山脈と相通ず。

四國山脈は、伊豫の西岸より、土佐の國境を走り、阿波の中央を過ぎ、海岸に至りて、紀伊山脈と相通ず。

中國山脈は、長門より起り、山陰、山陽、兩道の境を走り、山城の北境に至りて、近江に達す。

紀伊山脈は、紀伊の西部より東北に向かひ、大和の南境を繞り、伊勢の海を隔て、三河に入りて、赤石山脈となる。

赤石山脈は、三河の渥美半島より起り、遠江の北部を經、甲斐の西境を繞りて、信濃に入る。

臺灣山脈は、臺灣島の中央部より、南走するを、玉山山脈と云ふ。又其の北部の山脈には、高峰峻嶺、雜然として起伏せり。

第六章　火山脈

我國、山脈の過半は、火山脈にして、火山の數は、百七十餘座の多きに及べり。今、之を千島帶、富士帶、霧島帶の、三大帶に區別す。

千島帶火山脈は、堪察加半島より、千島諸島を經て、北海道に至る。

富士帶火山脈は、小笠原諸島より、八丈嶋、及び伊豆諸島を經て、本州に入る。霧島帶火山脈は、西南フィリッピン群島より、臺灣、琉球を經て、九州に入る。而して數多の火山脈は、概ね、本州中央部に會して、大火山地を成せり。今、左に主要の火山脈を掲ぐ。

- 千島帶
  - 千島火山脈、奥羽火山脈、那須火山脈、
  - 岩木火山脈、彌彦火山脈、
- 富士帶火山脈
- 霧島帶
  - 霧島火山脈、阿蘇火山脈、白山火山脈、
  - 能登火山脈、御嶽火山脈、

千島火山脈は、堪察加半島より來り、千島列島を過ぎて、北海道に至り、蝦夷山脈と交叉して、其の西部に蔓延す。

奥羽火山脈は、北海道の後志、膽振より起り、陸奥の北端に渡り、青森灣を過ぎ、陸羽の境上を走り、岩代に入りて、那須火山脈に接す。

那須火山脈は奥羽火山脈の南部に接して、下野の北部より、上野を經、信濃に入りて、富士帶火山脈に連る。

岩木火山脈は、一に、出羽火山脈と稱す。陸奥の岩木山より起り、南に走り、越後、岩代の境より、上野の西境に出で、信濃に入りて、富士帶火山脈に連る。

彌彦火山脈は、羽後の男鹿半島より起り、海を渡りて、越後の海岸を走り、富士帶火山脈に接す。

富士帶火山脈は、遠く南洋諸島に起り、小笠原島より、伊豆半島に連り、駿河、甲斐を經て、信濃に入り、こゝに、數多の火山脈と會し、末は、越

後に至りて、彌彥火山脈に連る。

霧島火山脈は、臺灣より、琉球諸島を經て、薩摩の南端に至り、大隅、日向の境に入り、北西に折れて、肥前に亘る。

阿蘇火山脈は、肥後より起りて、豐前、豐後の間を走り、國東半島より、四國に渡り、其の北岸を過ぎ、紀伊に入りて、遂に、三河の寶來寺山に連る。

白山火山脈は、長門の北部より、山陰道の海岸を、東走し、越前、美濃の境より、加賀、飛驒の境に至る。

能登火山脈は、佐渡より起り、能登半島を過ぎ、日本海を通ゝて、隱岐に至り、南の方、肥前の五島に連る。

御嶽火山脈は、越中より起り、飛驒、信濃の境に亘る。

第七章　平原

我國は、土地狹小なる上に、到る處に山嶽起伏すれば、廣漠なる平原少し。然れども、山間の低地、若くは、海濱の平地は、何れも、地質佳良にして、穀類蔬菜の產出に富めり。今、平原の有名なるものを、左に掲ぐ。

石狩平原、天鹽平原、十勝平原、兩羽平原、陸奥平原、
會津平原、越後平原、關東平原、尾濃平原、畿內平原、
筑紫平原、吉野川平原、臺灣西部平原。

以上の中、關東平原は、最も廣くして、方三十里乃至四十里あり。これに次ぐは、越後平原にして、長四十里あり。尾濃平原、陸奥平原、石狩平原等は、其の次なり。又、臺灣西部平原は、頗る廣濶にして、穀菜果實等に適もといふ。

第九章　河流

河流の形狀は、自ら、地勢によりて、定まるものなり。我國の地勢は、狹長にして、山脈、脊骨を爲せば、河流、概ね、其の中央より分疏し、兩面に流れて、太平洋、及び日本海に注ぐ、故に、長大なるもの鮮し。且つ、其の流路、山嶽高地の間よりするを以て、急灘激瀨甚だ多し、是れを以て、舟楫の利乏しきのみならず、大雨の時は、氾濫の害を蒙る處鮮からず。

我國の河流は、石狩川、信濃川、利根川を、三大河と稱し、球摩川、最上川、富士川を三急流と稱す。今、左に有名なる長江を掲ぐ。

石狩川、(一六七里)　信濃川、(一〇〇里)　北上川、(七九里)
阿武隈川、(七七里)　利根川、(七三里)　天塩川、(七〇里)
木曾川、(六六里)　最上川、(六二里)　天龍川、(六〇里)
射水川、(五八里)　阿賀川、(五七里)　神通川、(五二里)
江川、(五〇里)　十勝川、(五〇里)　紀伊川、(四七里)
川内川、(四六里)　大井川、(四六里)　吉野川、(四一里)
筑後川、(三五里)　淡水河、(三〇里)

第九章　湖沼

我國の湖沼は、其の生成によりて、概ね、四種に區別することを得べし。第一、海底隆起して、內海或は灣水の、一部分を圍みたるもの。第二、地面陷落して、凹處に水を湛へたるもの。第三、噴火山の舊噴火口に、水の溜れるもの。第四、近海の一部、漸次堆沙の爲に圍繞せられたるもの。而して、此の四種中、第三種のもの最も多し。今、左に有名なる湖沼を掲ぐ。

琵琶湖、(周廻七三里餘)　霞浦、(仝　三六里)　猿間湖、(仝　一八里)
猪苗代湖、(仝　一六里餘)　中海湖、(仝　一六里餘)　八郎潟、(仝　一五里)
楓蓮湖、(仝　一五里)　小河原湖、(仝　一三里餘)　尖道湖、(仝　一三里)

印旛沼（仝　一二里）十和田湖（仝　一〇里）洞爺湖（仝　一〇里）
支笏湖（仝　七里餘）

第十章　鑛泉

鑛泉は、鑛物を含有する泉にして、温泉と冷泉との二種あり。我國は、火山多きを以て、温泉少からず。中にも、鹽類泉、硫黄泉、最も多くして、酸泉、鐵泉、單純泉等、較、鮮し。

伊豆の熱海、修善寺、相模の塔の澤、宮の下、攝津の有馬、上野の伊香保、下野の鹽原等の温泉は、鹽類泉、鹽泉にして、又、相模の蘆の湯、肥後の山鹿等の温泉は、硫黄泉なり。上野の草津、豐後の別府等は、炭酸泉、相模の湯本、紀伊の龍神等は、鐵泉にして、又、伊豫の道後、筑前の武藏等の温泉は、單純泉なり。此の外、臺灣にも亦温泉あり。而して、温泉は、其の種類と、其の土地の氣候等によりて、病を治するに、特種の

効能あるが故に、此の如く、鑛泉の多きは、衛生上、誠に幸福のことゝいふべし。

第十一章　氣候

氣候の寒暖は、國の位置によりて略定まれども、又地勢、風向、海流、雨雪量等に關して、大に差異を生ずるなり。故に、同緯度に在る土地と雖、其の寒暖、常に相同じきこと能はず。

我國は、南北の長、大約、一千百餘里に亘り、北は殆ど寒帶に近く、南は、熱帶に屬するを以て、各地の氣候に差別あるは、勿論なるべし。加之、其の近海には、暖流と寒流とありて、大に氣候に影響を爲せり。

但し一般の温度は、緯度の割合に比して、稍、寒冷なりと雖、亞細亞大陸に比すれば、寒暖共に中和にして、人の健康に適し、禽獸草木の生育を助く。今、左に各地の温度を示す。

地名＼季節	年中平均温度	一月	八月
臺灣南端	二四、〇度	一九、〇度	二七、〇度
基隆	二二、〇	一四、四	二九、〇
那覇	二一、七	一六、七	三三、一
長崎	一六、〇	一四、六	二七、六
廣島	一四、六	一六、七	三五、二
和歌山	一五、三	一三、五	三四、八
東京	一三、八	一二、一	二五、五
金澤	一三、一	一一、五	二五、九
函館	八、一	五、三	二〇、九
宗谷	四、九	五、一	一五、八

明治廿八年末調査ニ據ル

第十三章　風

我國に吹く風は、西北の亞細亞大陸と、東南の太平洋とより來るもの多し。氣候の寒暖、之れに影響すること少からず。即ち夏時は、亞細亞大陸頗る温熱にして、空氣稀薄となるが故に、太平洋より、此の地に向ひて吹く風を生ず。これ夏時に、東南風多き所以なり。之れに反して冬時は、亞細亞大陸、甚だ寒冷にして、空氣稠密となる、故に此の地より、太平洋に向ひて吹く風を生ず。これ冬時に、西北風多き所以なり。

又、九月中旬前後に方りて、颶風の起ること多し。此の風は、フィリッピン群島若くは、臺灣近海より起り、東北に進み、九州四國を過ぎ、斜に本州を通過して、遂に北海道に及ぶを常とす。

第十三章　雨量

我國は、四周皆海なるが故に、水蒸氣多く、隨ひて、雨雪も亦多し。殊に夏時は、太平洋より、冬時は、日本海より、共に、多量の水蒸氣を送るを以て、夏時は太平洋に面せる地方に雨多く、冬時は日本海に向へる部分に雨雪多し。但し、其の他の山脈は、風向等に因りて、多少の變化なきにあらず。

全國を通じて、雨量の多きは、六月、梅雨の時季にして、九月頃には、驟雨多しとす。各地方の雨量を比較すれば、臺灣の西北部、雨量甚だ多くして、二千三百粍、乃至三千粍なり。之に次ぎて、北陸地方最多くして、二千六百粍、四國、九州の東部は、二千粍、乃至二千四百粍なりと云ふ。

之れに反して、雨量少きは、山陽道、及び、四國の北岸地方にして、千四百粍より、千六百粍に過ぎず。更に少きは、東北地方、及び、北海道の東部にして、其の量、僅に千二百粍、乃至八百粍とす。

第十四章　海流

我國の近海には、寒暖二派の海流あり。暖流は、臺灣の南より、北東に進み、九州の南にて、本支二流となり、本流は、九州、四國、及び本州の東南岸に沿ひて流れ、鹿島洋より陸地を離れて、東方に向ふ、之れを黑潮と云ひ、支流は、九州の西岸より、對馬海峽を過ぎ、日本海に入りて、本州の西北岸を流る、之れを對馬海流と云ふ。暖流の温度は、周圍の海水より高きこと、概ね、四五度なり。寒流は、ナコック海の北東隅より、堪察加半島の西を進み、千島列島を經て、北海道の東南に至り、本州の東岸を南流して、鹿島洋に至り、黑潮と合して止む、之れを親潮、又は、千島海流と云ふ。其の温度は、黑潮より低きこと、大約五度半歟乃至八度とす。又別に一寒流あり、樺太島の東岸より宗谷

海峡を過ぎて、日本海に入る、之れを樺太海流と云ふ。此の他、來滿海流とて、東海に入るものあり。

是れ等の海流中、陸地の温度に、最も影響を及ぼすものは、對馬海流と、親潮との二流なり。就中對馬海流は、日本海沿岸地方の嚴寒を調和し、親潮の本流は、陸地の温度に、影響を與ふること較、尠し。

第十五章　植物

日本群島は、熱帶に屬する臺灣より起りて、寒帶に近き千島列島に入るが故に、寒、暖、熱、三帶の植物を併有す。且つ、土質肥沃にして、降雨多量なれば、植物の種類夥しくして、名草奇木鮮からず。

臺灣、琉球及び、小笠原諸島に産する植物は、熱帶類多し。其の主要なるものは、榕樹、羊齒、烏木、蘇鐵、竹柏、樟樹、露兜樹、檳榔樹、椰子、檳榔樹、龍眼肉、芭蕉實、芒實等なり。

九州、四國、本州、及び蝦夷の南部に産する植物は、暖帶樹類にして、其の種類頗る多し。就中、主要なるものは、松、杉、檜、樅、公孫樹、五鬚松、山毛欅、柯樹、山茶、茶、梅、橿、榧、橡、栂、櫟、櫻、欅、楓の類とす。其の他草類は枚擧に遑あらず。

蝦夷島の西北部と、千島列島とに産する植物は、寒帶樹類に屬す。赤楊、偃松、椴松、羅漢松、等は、其の主要なるものなり。此の外、海産植物多し。

第十六章　動物

我國には、深山鮮からずと雖、動物の種類多からず。殊に猛獸、鷙鳥の類甚だ稀なり。猪、鹿、狐、狸、鼬、兎等各地に産し、熊、狼は、北海道に多く、水牛、山猫、豹は、臺灣に多し。

海産類には、鯨、海豹、海獺、膃肭獸等あり。ここに魚介は、最も多くし

て、全國到る處に産せり。就中最も普通なるは、鰮、鱸、鯛、鰈、鰹、鮑、蛤、沙蟹等にして、南方には、河豚、烏賊、海龜、珊瑚、眞球、貝鰒の類多く、北方には、鱒、鮭、鱈、大口魚の類多し。又、河湖よりは、鯉、鮒、鰻の類を産す。」鳥類には、鷲、鷹、雁、鴨、鷺、鳶、鴉、雉、鳩、鶴の類あり。小鳥の種類も亦、甚だ少からず。

蟲類中の蠶は、我國の風土に適し、各地之れを飼養せざるはなし。生絲、繭、種紙の産出多きは、これあるが爲なり。

第三篇　地方各誌

第一章　總說

本篇は、特に各地方に就きて、地理上天然の狀態、及び人爲より生ぜる諸現象を說明せる者にして、もと、地文地理、及び人文地理に屬すべき者なれども、今、便に從がひて、本篇を置き、更に、第四篇に於て、一

般に亘りて、人文地理を說明せんとす。

第一節　地上區劃

全國を大別して、畿內八道、及び臺灣とす。八道とは、東海、東山、北陸、山陰、山陽、南海、西海、北海の各道なり。

臺灣の外、畿內八道を分かちて、八十五國となす。

畿內(五國)　山城、大和、河內、和泉、攝津、

東海道(十五國)　伊賀、伊勢、志摩、尾張、參河、遠江、駿河、甲斐、伊豆、相摸、武藏、安房、上總、下總、常陸、

東山道(十三國)　近江、美濃、飛驒、信濃、上野、下野、磐城、岩代、陸前、陸中、陸奥、羽前、羽後、

北陸道(七國)　若狹、越前、加賀、能登、越中、越後、佐渡、

山陰道(八國)　丹波、丹後、但馬、因幡、伯耆、出雲、石見、隱岐、

山陽道(八　國)　播磨、美作、備前、備中、備後、安藝、周防、長門、
南海道(六　國)　紀伊、淡路、阿波、讃岐、伊豫、土佐、
西海道(十二國)　筑前、筑後、豐前、豐後、日向、大隅、薩摩、壹岐、對馬、琉球、
北海道(十一國)　渡島、後志、石狩、天鹽、北見、膽振、日高、十勝、釧路、根室、千島、

臺灣には國別なし。

此等の區劃は、昔時の行政上の區劃にして、主として、山河自然の形勢によりて分ちし者なれば、當時の如き交通不便の代には、尤も便利なりしも、既に、交通機關の整頓したる今日にありては、却て不便少からざるが故に、今は、別に府縣の區劃をなして、道國は、殆んど地理上の區劃の如くなり了れり。

第二節　行政上の區劃

行政上の便利よりして、北海道と臺灣とを除くの外、我國を三府四十三縣に分かち、別に北海道には、北海道廳、臺灣には、臺灣總督府を置きて、之れを統治せしめらる。

東京　京都　大阪(以上府)
神奈川　兵庫　長崎　新潟　埼玉　群馬
千葉　茨城　栃木　奈良　三重　愛知
靜岡　山梨　滋賀　岐阜　長野　宮城
福島　巖手　青森　山形　秋田　福井
石川　富山　鳥取　島根　岡山　廣島
山口　和歌山　德島　香川　愛媛　高知
福岡　大分　佐賀　熊本　宮崎　鹿兒島
沖繩(以上縣)

此れ等の府縣は、一國若しくは、數國に亘り、或は、一國内の數郡を限りて管轄せる者なり。

又、府縣を分かちて郡とし、郡を分かちて町村とす。其の特に大なる都會は、之れを市として郡の外に置く。市、及び町村は、初級の行政區劃にして、自治的團體たり。府縣、及び郡も亦郡制、府縣制施行の後は、行政區劃たると共に、自治の團體となる者なり。

第二章　畿内

第一節　總說

一、位置、廣袤、人口。　畿内は、本州の中央部に位して、東は東海道に境し、北は、東山、山陰兩道に連り、西は、山陽道に接し、大阪灣に臨み、南は、南海道の紀伊に隣れり。東西長き處二十五里、南北三十五里、面積大約四百四十五方里、人口二百五十七萬三千四百十五人あり。

即ち一方里につき、五千七百七十五人の割合にして、其の稠密なること各道に比して第一とす。

二、區劃。　畿内は、山城、大和、河内、和泉、攝津の五國を五市、三十郡に分かち、京都、大阪二府、奈良、兵庫、二縣に分ちて管轄す。

三、地勢。　畿内の東南北は、概ね高地なり。殊に、大和の南部は、深山高嶽相重なりて、唯十津川の近傍に平地あるのみ。然れども、和泉、河内、攝津の三國は、謂はゆる、畿内平原にして、大阪灣に臨める地方、淀川、大和川の灌域の如きは、一望限りなき田野なり。

四、海岸。　畿内は、三方、皆、山脈に圍まるゝを以て、其の海岸は、西方に、大阪灣あるのみ。大阪灣は、一に茅渟海と稱し、和泉、攝津の間に灣入す。内に、神戸、兵庫、大阪、堺の四港あり。兵庫港の西に和田岬長く突出す。これより西は、白沙青松の勝地なり。

五、山嶽。　山嶽の著名なるものは、鞍馬山、大悲山、山城の北に峙ち、

愛宕山(三三八〇)は丹波の境に聳ゆ。其の南に高雄山、嵐山あり。高雄は、紅葉、嵐山は、櫻花を以て世に知らる。比叡山(二七二〇)は、近江の境に跨り、鷲峯山、笠置山は、大和の境に臨む。笠置山は、後醍醐天皇行宮の舊蹟ありて、其の名、殊に著る。

大和には、高山頗る多し。國見山(三、五六〇)は、伊賀の境にあり。高見山(四、三二〇)大臺ヶ原山(五、九〇〇)は、伊勢の境に峙てり。又、南部には、金峯山、大峯山(六、二一〇)、彌山(六七二〇)、釋迦ヶ岳(六、四〇〇)、大日嶽(六、一七〇)等の諸山相連りて、嶮峻謂ふべからず。中に就きて、金峯山は、吉野山とも稱し、櫻花の名所にして、我國第一と稱せらる。

河内には、大和の境に、金剛山(三、九七〇)、信貴山、生駒山等相連れり。金剛山の西麓に千早城の舊趾あり、最も世に著る。

和泉の山嶽は、紀伊の境にある藏王峠、葛城山、犬鳴山等の名あり。

攝津には、北部丹波の境に、妙見山(三、〇〇〇)、箕面山等聳え、西部に、武庫(三、〇六〇)、摩耶、鐵拐等の諸山連る、

六、河流。 畿内の河流は、概ね、大阪灣に注げり。淀川は、畿内第一の大河にして、上流を宇治川と云ひ、近江の琵琶湖より發し、桂川、木津川を合せ、南流して、大阪灣に注ぐ。其の幅廣く水深きを以て、舟運の便利多し。

此の他、攝津の武庫川、池田川等、稍、大なり。又神戸、兵庫の間を流るゝ湊川は、小流なれども、楠正成戰死の舊蹟たるを以て、其の名世に著る。

七、氣候。 畿内の氣候は、概ね、温暖なれども、山地は、寒氣强くして、晴雨常なし。殊に、京都近傍は、冬時は、叡山颪の爲めに、寒氣を增し、夏時は、却て涼風少し。大阪地方は、暑氣稍、强けれども、寒氣は、酷しからず。

雨量は、瀬戸内海の寡雨地方に屬すれども、梅雨、及び夏雨は、稍、多量

なり。

八、物産。　畿内の物産は、京都の西陣織、友禪染、刺繍物、清水燒、其の他の陶器、宇治の茶、大和の飛白、奈良晒、奈良漬、吉野紙、吉野葛、堺の鐵器、及び段通、池田炭、伊丹酒、神戸の摺附木、大阪の紡績糸、瓦斯織、細工物、硫酸等を最もとす。　其の他、米、麥は、攝津、河内に多く、木綿は、河内、和泉に産し、木材は、大和より出づるもの著名なり。

第二節　都會

一、京都市及び其の近傍。　京都は三府の一にして、山城の北部にあり。　東北西の三方は、山に包まれ、南方一面のみ平野なり、市街は井然として、七條の大衢を通じ、加茂川、其の間を流れて、全市を洛中、洛外の二部に分かつ、東西一里餘、南北殆ど二里、人口三十二萬八千四百餘あり。　京都府廳此の處にありて、山城、丹後の二國及び、丹波の五郡を管轄す。

此の地は、往昔、桓武天皇より、明治元年に至るまで、一千七十六年間、帝都のありし所なり。　舊皇居は、市の北部にあり。　二條の離宮は、西部にあり。　山水秀麗にして風致に富み、且つ千有餘年間の名祠巨刹、依然として存するもの多ければ、勝を探り舊を尋ぬるもの、常に絶えず。　就中著名なるものは、金閣寺、銀閣寺、知恩院、清水寺、東福寺、南禪寺、東西本願寺、妙心寺、仁和寺、大德寺、建仁寺、及び加茂、北野、平野、祇園等の各社等枚擧に暇あらず。　交通は、頗る便利にして、陸には東海道線、奈良線及び舞鶴に至るの鐵道線路ありて、瀘車の便を得、水には、淀川の水運あり。　且つ近年、近江の琵琶湖より水道を疏して、運輸の便を開けり。

京都の南二里餘にして、伏見、淀の名邑あり。　伏見は、人口一萬八千二百餘、京阪及び奈良に通ずる、要路にして稍繁盛の地なり。　又こ

れより西南に當りて、八幡、山崎の名邑あり。八幡は、男山神社のある所なり。

二、大阪市、及び其の近傍、

大阪は、攝津の大都會にして、三府の一に居る。淀川の河口に跨りて、大阪灣に臨めり。東西二里、南北殆ど一里餘、人口四十八萬八千九百餘、東京に次げり。大阪府廳此處にありて、河内、和泉の二國、及び攝津の一市、四郡を管轄す。市街を、東、西、南、北の四區に分かち、溝渠縱横其間を貫通し、運送の便ありて帆檣林立し、又、川口には、諸國の船舶、常に輻輳し、鐵道は、東京と神戸とに通ずるもの、外、堺、奈良、及び四條畷等に通ずるものあり。水陸の交通、極めて便利にして、商業甚だ繁盛なり。又、制造業も近年盛に興りて、制作品を出すこと甚だ多し。市街の東に大阪城あり、豐臣秀吉の建築せしものなるが、今は唯、牙城のみ存して、第四師團の本營となれり。城の北には、淀川を夾みて、砲兵工廠、造幣局等あり、又中部都督部ありて第三、第四、第九、第十の四箇師團を管轄す。南には、天王寺、生國魂神社等あり。

大阪の西に、池田の名邑あり、精酒の釀造を以て著る。

堺市は、和泉國に在り。大阪を距ること、汽車半時程なり。人口四萬六千九百餘、往時は、外國との互市場たりし所なり。鐵器及び、段通等渡織物を産す。其の南西に、岸和田あり。

三、神戸市、及び其の近傍。

神戸は、五港の一にして、我國第二の貿易場なり。攝津の西部に在りて、大阪灣に臨む。人口十五萬八千九百餘。兵庫縣廳を此處に置きて、播磨、但馬、淡路の三國、及び、丹波の二郡、攝津の一市三郡を管轄す。港内水深くして、碇泊に宜しく、内外の船舶、常に輻輳せり。兵庫は、西にありて舊と神戸と區別ありしが、今は、合して一市となれり。其の間に、湊川あり。川の東に湊川神社ありて、楠公を祀れり。湊川の西岸に、福原の舊趾あり。

市の東に、生田、森、西に、一の谷の古戰場あり。又、西宮、伊丹、尼ヶ崎の名邑あり。西宮、伊丹は、釀酒を以て著はる。而して、北は、一帶、摩耶、武庫等の連山にして、布引瀑、有馬の溫泉等此の間にあり。

四、奈良市、及び其の近傍。 奈良は、大和の北部にあり。人口二萬六千六百餘。奈良縣廳ありて、大和一國を管轄す。此の地は、元明天皇より、桓武天皇の平安遷都に至るまで、八十四年間、帝都たりしを以て、名所舊蹟、頗る多し。市の東に、春日神社、三笠山等あり。其の北に東大寺あり、大佛を安置す、高さ五十餘尺あり。又、その側なる正倉院には、千餘年前の珍器異什を藏せり。

奈良の西に、郡山あり、亦名邑たり。大和の東部、伊賀の境に、月ヶ瀬あり、梅花を以て著る。又、其の國の中央なる吉野山は、南朝四十餘年間の舊趾にして、櫻花の名所なり。其の地方に、藤原鎌足を祀れる多武峰あり。多武峰の西方に、畝傍山あり、神武天皇の御陵及び橿原宮の舊蹟を存す。法隆寺は、其の北方に當れり。又、河内には、四條畷神社あり、楠正行を祀れり。

第二章　東海道

第一節　總說

一、位置、廣袤、人口。 東海道は、本州の中部に位して、太平洋に面する一帶の地なり。西は、畿內、及び紀伊國に接し、北は、東山道に界す。其の形、東西に長くして、南北に狹く、長百二十里、幅三十二里餘、面積二千六百五十八方里、人口九百六十二萬〇八百二十五人あり。即ち、一方里に三千六百十八人の割合にして、其の稠密なること、畿內に次げり。

二、區劃。 東海道は、伊賀、伊勢、志摩、尾張、三河、遠江、駿河、甲斐、伊豆、相摸、武藏、安房、上總、下總、常陸の十五國にして、之れを七市、百〇八郡に

分かち、東京府、及び神奈川、埼玉、千葉、茨城、三重、愛知、靜岡、山梨の八縣之を分轄す。

三、地勢。

本道は、東山道に接する地方、山嶽多くして、地勢南方に傾斜す。故に太平洋の沿岸は、概ね平原なり。但畿内に接せる地方のみは、地勢、東方に低下せり。河流は、亦、地勢に從ひ、南流して、海に入る。關東平原は、東山道に跨りて、大約百三十方里を占む。地味肥え、人煙稠く、實に本邦第一の平野たり。尾張平原は、尾濃二國に連りて、地味豊饒なり。其の他、伊勢の東部、三河の矢矧川近傍、遠江の天龍川近傍、駿河の浮島ヶ原亦稍〻大なる平原とす。唯、房總及び伊豆の兩半島は、共に、山嶽多くして、殆ど、平野なし。

四、海岸。

本道は、伊賀、甲斐二國の外、悉く太平洋に臨めるを以て良港名泊甚だ多し。中にも、武藏の横濱は、五港の一にして、相摸の横須賀は、第一鎮守府の軍港なり。伊勢に四日市の良港あり。伊

豆に下田、相摸に浦賀、駿河に清水の名泊あり。其の他、鳥羽、熱田、武豊、木更津、銚子、等、皆、碇泊に便なる港灣なり。

本道の沿海は種々の名稱を以て、區別せられたり。即ち、常陸の沖を鹿島灘と云ひ、上總の海岸を九十九里濱と云ひ、安房の沿岸を、房州沖と稱し、武藏の内海を東京灣と稱し、伊豆に沿ひたるを豆州沖と稱す。その他、駿河の駿河灣、遠江の遠州灘、三河の袖ヶ浦あり。其の西は、即ち伊勢海にして、灣入頗る大なり。

又、岬は、常陸に、犬吠崎あり。上總に大東崎あり。野島崎、富津岬、相摸に、觀音崎、劒岬あり。觀音崎には、數箇の砲臺を設け、富津と相對して、東京灣の口を扼す。其の他、伊豆の石廊崎、遠江の御前岬、三河の伊良湖崎、尾張の師崎、志摩の安乘崎、大王崎等あり。

五、山嶽。

本道には、種々の山脈ありて相連れり。西部畿内の境にあるを鈴鹿山脈と云ふ。其の脈中に鈴鹿山(一、二三〇)、黑法師山

(七、〇九〇)等の名山あり。又、中部、三河、遠江等より、信濃に連るを、赤石山脈と稱す。此の脈中には、鳳來寺山、秋葉山(五、四〇〇)、黑法師山(七、〇九〇)、大無間山(九、三四〇)等、最も著はる。次に武藏の西部より、相摸、甲斐の兩國に蟠延せる、關東山脈には、武甲山(四、三二三)、雲取山(六、六六九)、天目山(三、五〇〇)、金峯山(八、四二〇)等あり。南方の豆南諸島より來り、伊豆、駿河を經て、信濃に入れる富士帶火山脈には、富士山(一、二、三七〇)あり。此の山は、脈中の主峯なるのみならず、實に、本邦第一の名山にして、其の形、白扇を倒に懸るに似たり。天晴れ氣澄める時は、十三州より望むことを得ると云ふ。愛鷹山、箱根山、天城山等も、亦、此の脈中の高峯なり。常陸にある、阿武隈山脈にては、筑波山(二、八九七)最も著はれ、房總の、鹿野山、清澄山等皆世に知らる。

六、河流。 河流の大なるものは、利根川、天龍川、富士川、木曾川等なり。之を本道の五大川と云ふ。利根川(七三)は、我國三大川の一にして阪東太郎の稱あり、源を、上野の文珠山に發し、下總に至り分かれて二派となる。本流は、鬼怒川、小貝川を合せて、銚子港より海に注ぐ。舟楫の便、頗る宜し。支流は、武藏、上總の間を流れて、東京灣に入る。所謂江戸川是なり。天龍川(六〇)は、源を、信濃の諏訪湖より發りし、遠江に入り、二派に分れて、遂に、遠江灘に入る。此の河に架する鐵橋は、本道第一の長橋にして、長八百餘間あり。大井川(四六)は、源を白根山に發して、駿河灣に注ぐ。水勢激迅にして、運輸の便なし。富士川(三一)は、甲斐の釜無川、笛吹川、蘆川の合したるものにして、駿河を貫流し、田子の浦に入る。我國三急流の一なり。木曾川(六六)は、信濃の木曾山中より發し、美濃平原を潤して、伊勢の海に注ぐ。其の他、伊賀に、名張川あり。伊勢に、雲出川あり。三河に矢矧川(二八)、太平川、豐川あり。駿河に、安倍川(二〇)、相摸に、馬入川、酒匂川、武藏に、荒川あり。荒川の下流は、墨田川にして、東京の市街を貫流

す。又、常陸に、那珂川、久慈川等あり。

常陸の霞ヶ浦は、本邦第二の大湖(周圍三十六里)にして、汽船常に往來す。之れに次ぐは、北浦(一五)にして、霞ヶ浦の北にあり。又、其の次ぎは、下總の印旛沼(一二)、なり。其の他、手賀沼、涸沼、及び富士八湖と稱する火山湖あり。八湖とは、蘆湖、川口湖、山中湖、精進湖、本栖湖、富士沼、西湖、西尾連湖是なり。

七、氣候。 本道は、土地狹長なるを以て、各地の氣候一樣ならずと雖、大抵は、極暑三十一二度より三十四五度に至り、極寒八九度より四五度に至る。東京は、一年の平均温度殆ど十三度八分にして、濱松、沼津、銚子等は、これより高きこと二度なり。津市、名古屋市等の温度は、略、其の中間とす。但し、伊豆七島、小笠原群島は、熱帶に近き洋中に散在するを以て、四時共に頗る温熱なり。

風向は、夏期に東南風多く、冬期に西北風強し。又夏期は濕潤にして、四期は乾燥なり。

雨量は、他道に比較すれば、稍、多しと雖、北部は、少く、南部は、多し。殊に甲斐近傍は、頗る少量なり。又、一年の中、一月より三月までと、十一月より十二月までとは、一般に降雨寡し。

八、產物。 本道は、氣候温暖にして、雨量適度なるが故に、平地には、穀物能く成熟せり。即ち米は、尾張、武藏、相摸、上總、下總、常陸、伊勢に產すること多く、麥は、武藏、尾張、下總より出づること多し。又、粟は、神奈川縣に多く、甘藷は、千葉、及び川越近傍に多く、大豆は、平原地方一般に栽培せられ、玉蜀黍は、駿河、甲斐に多く植ゑられ、水戸の煙草、駿河の茶、尾張の綿、亦、皆著名なり。養蠶は、多少之を業とせざる所なしと雖、埼玉、山梨、最も盛にして、神奈川之れに次ぐ。材木は、伊豆の天城山を本道第一とし、之れに次ぐを、駿河、遠江となす。薪と炭とは伊豆と下總とより多く出だせり。

織物は、尾張、武藏より産出するもの多し。即ち尾張にては、愛知織、鳴海絞の名高く、武藏にては、八王寺織、秩父絹の名、著しく、甲斐の海氣織、伊勢の松坂縞、津縝子、伊豆の八丈絹、下總の結城紬、銚子縮等、亦世に知らる。紡績糸は、東京、名古屋、三重の産最も多し。陶磁器は、尾張の瀬戸燒、常滑燒、伊勢の萬古燒、伊賀の伊賀燒等、其の産額甚だ多し。殊に名古屋の七寶燒は、世に著れたる名品なり。其の他、遠江の疊表、砂糖、伊勢の春慶塗、染形紙、煙草入、駿河の半紙、寄木細工、甲斐の葡萄酒、伊豆の雁皮紙、武藏の紙、袋物、細工物、下總の流山味淋、行德鹽、名古屋の扇、皆名高き産物なり。又酒は、尾張に多く、醬油は、下總の野田、銚子及び、常陸の土浦に多し。

海産物の多きは、九十九里濱にして、殊に、鰮を産すること夥し。即ち一年の産額、凡百四五十萬圓ありと云ふ。次ぎに、海産物を多く出だす處を、三重、神奈川、靜岡、愛知とす。伊豆、駿河の鰹、伊勢の鰕、尾張、三河の海參、駿河の鯛、東京の海苔、伊勢、志摩の石花菜等、皆、名高き名産なり。

鑛物は、金は、甲斐、駿河、伊豆より出だし、常陸より石炭を出だし、遠江より石油を出だす。又、石材は、甲斐の水晶、雨畑硯、伊豆の伊豆石、相摸の小松石、常陸の寒水石、三河の御影石、名倉砥等有名なり。

第二節　都邑

一、東京市、及び其の近傍。

東京は、我が帝國の首府なり。武藏國の南部に在りて、東京灣の西北岸に臨み、關東平原の沃地に連れり。東京府廳、此處にありて、武藏の一市八郡と、小笠原諸島と、伊豆諸島とを管轄す。市街は、東西三里、南北四里に亘り、人口百二十四萬二千二百餘を有す。全市を分ちて、十五區とす、街衢、頗る繁盛にして、大街には、鐵道馬車、縱横に通し、瓦斯燈、電氣燈立ち列び、電信線、

電話線、蛛網の如く張り亘り、車馬の往來日夜絶えず、行人常に絡繹たり。　就中、京橋の銀座通は、家屋總べて煉瓦造、石造にして、商業甚だ盛に、日本橋は、大商巨賈、軒を駢べて、市況殷富なり。　宮城は、市の中央、小高き丘山に聳えたり。　宮殿の瓦色、古松老杉の間に隱映して、壯嚴云ふ可らず。　諸官省、國會議事堂等、大概其の周邊に在り。其の他、大學校を始め、各種の學校、兵營、病院、銀行、會社、製造場、神社、佛閣、公園、博物館等の宏壯巨麗なるもの、所々に散在す。　上野、淺草、芝、愛宕、深川等の公園、向島、龜井戸、九段、王子の勝地等は、市民の遊賞する所なり　汽車、鐵道は、此處を中心として、各地方に發するもの多し。　中山道、及び奥羽鐵道は、上野より、甲武鐵道は、飯田町より、東海道鐵道は、新橋より、武總鐵道は、本所より發す。　故に、交通最も便利にして、旅人の往來、貨物の出入極めて殷賑なり。

東京は、舊と江戸と稱し、二百七十年間、德川氏の覇府を構えたる所

なりしが、明治元年、鳳輦を此處に移し給ひて、東京と改められたり。東京の西南に、品川驛あり。　東北に、千住驛あり。　又西方にある八王子は、人口二萬三千餘、甲州街道に當れる小都會なり。

二、浦和町、及び其の近傍。

浦和町には、埼玉縣廳ありて、武藏の九郡を管轄す。

浦和の北に、大宮、熊谷等の諸驛あり。　大宮は、奥羽、中山道兩鐵道の分岐する所なり。　其の西に川越あり、人口二萬餘、織物を産出す。熊谷には、熊谷直實の舊蹟あり。

三、千葉町、及び其の近傍。

千葉は、下總の南隅にありて、東京灣の東岸に臨む。　人口二萬五千餘。　千葉縣廳此處にありて、安房、上總の二國と、下總の六郡とを管轄す。

千葉町の東北に、佐倉町あり。　第一師團の第二旅團を置けり。　佐倉の東に成田あり。　成田不動尊の名世に高し。　下總の東端に、銚

子港あり。人口一萬六千餘、利根川口に臨みて、船舶輻輳す。其の他、下總には、行德、古河、結城、佐原、安房には、北條、館山、上總には、木更津等の名邑あり。館山港には、軍艦常に碇泊す。

四、水戸市、及び其の近傍。

萬餘。茨城縣廳ありて、常陸一國、及び下總の三郡を管轄す。市街は、那河川に臨みて、運輸の便多し。此の地の近傍に、那珂港あり。船舶の碇泊する所なり。

五、横濱市、及び其の近傍。

横濱は、東京を西南に距ること八里許、東京灣の西岸に位す。五港の一にして、我國第一の貿易場なり。本牧岬、其の東南を擁して、港内水深く、内外の船艦、常に輻輳せり。人口十六萬餘、市街頗る清潔なり。神奈川縣廳此處にありて、相摸一國、及び武藏の一市、三郡を管轄す。横濱の南、相摸の三浦半島に、横須賀あり。海軍鎮守府のある所に

して、造船所を設けらる。港内水深くして、船艦の碇泊、最も安全なり。其の南に、浦賀港あり、米艦の始めて寄港せし處なり。横須賀の西北に、鎌倉あり、源頼朝の覇府を置きし所にして、鶴ヶ岡八幡宮、建長寺、長谷の大佛等名所古蹟甚だ多し。鎌倉の西なる江ノ島は、風光佳麗なる所なり。

小田原は、相摸第一の都會にして、人口一萬四千八百餘あり。小田原の東に、大磯の海水浴場あり、西に箱根の温泉あり、倶に浴客常に多し。箱根の山頂に蘆ノ湖あり、水清洌にして、風光佳麗なり。湖畔に離宮を設けらる。箱根峠は、昔時、海道第一の難所と稱せし處なり。

六、甲府市及び其の近傍。

甲府は、甲斐の都會にして、人口三萬四千三百餘あり。市街端正にして、生糸、織物、及び葡萄酒の釀造盛なり。山梨縣廳此の處にありて、甲斐一國を管轄す。此の國、山多

くして、地勢東西に分かる。其の東部を郡内と云ふ、海氣織の産地なり。

甲府の東に、勝沼あり、葡萄酒の産地たり。馬入川の上流桂川に、猿橋と稱する、奇工の橋あり。又、身延山には、久遠寺と稱する、法華宗の巨刹ありて、其の名世に著はる。

七、靜岡市、及び其の近傍。

川家康の退隱せし地なり。靜岡は、舊と駿府、又、府中と稱す。德道の要地を占む。人口三萬七千八百餘、靜岡縣廳此の處にありて、東京と、名古屋との中間に位して、東海駿河、遠江の二國と伊豆の内二郡とを管轄す。

靜岡の南、海に濱して、久能山あり。德川家康の廟を存す。其の東の清水港は、東京、横濱と汽船相通ず。港の東南に三保ヶ崎あり、遠く海中に斗出し、翠松其の上に繁茂し、山水頗る明媚なり。三保ノ松原と稱するは、是れなり。港の北に清見潟あり、田子の浦と、共に名勝

の地なり。靜岡の東に、沼津あり、亦繁華の都會とす。

濱松は、遠江第一の都會にして、海道の要路に當る。人口一萬六千二百餘あり。その西の濱名灣は、小汽船來往して、風景絶佳なり。

濱松の東方、天龍川の河口に掛塚の港あり。

伊豆の東海岸に、熱海の温泉あり、氣候温和に、風光秀絶、浴客常に多し。下田は、伊豆半島の南にありて、遠州灘を往來する、船舶の碇泊場なり。

八、名古市、及び其の近傍。

名古屋は、尾張の中央に位して、木曾川の灌域にあり。人口二十萬六千七百餘、三府に亞げる大都會なり。愛知縣廳此の處にありて、尾張、三河の二國を管轄す。此の地は、東海道鐵道の要衝に當り、其の支線、知多半島に通ず。又、關西線として、伊勢に通ずる鐵道あり。今や成らんとする中央鐵道は亦終點を此の處に置く。水路には、近傍に、熱田、半田、武豊の諸港ありて、

往來甚だ便利なり。名古屋城は、市の北に在り。慶長十五年德川義直の建築に係る。天主閣の金鯱は、光澤燦爛稀世の壯觀なり。今は第三師團の本營たり。

名古屋と、市街を接して、熱田町あり。人口二萬餘、伊勢に渡る要津にして、汽船常に出入す。町の東に、熱田神宮あり、草薙の寶劍を祀る。又、名古屋の東北に、瀨戸村あり、陶器の製造を以て世に著る。

熱田以南の地は、即ち知多半島にして、東岸に半田、武豊の兩港あり。西岸に陶器を產する常滑あり。熱田の東數里に鳴海、有松あり。共に海道の通路にして、染物を產す。有松の南に、桶狹間の古戰場あり。

三河の岡崎は、人口一萬七千三百餘、德川氏創業の地なり。其の東に、豊橋あり、人口一萬五千餘、此の地に第三師團の第十七旅團を置かる。

九、津市、及び其の近傍。津市は、伊勢の中央に當れる海岸にあり。人口三萬餘、市街繁昌なり。三重縣廳ありて、伊賀、伊勢、志摩の三國及び紀伊の二郡を管轄す。此の地の東に贄崎あり、伊勢海を往來する汽船の碇泊處たり。

津市の北、八里許にして、四日市港あり。人口二萬餘、五港に次げる良港にして、特別輸出港たり。相摸の横須賀、尾張の熱田と、汽船相往來す。其の北に桑名港あり、熱田に渡る要津なり。

津の南に、松阪あり、人口一萬三千餘あり。其の南に宇治、山田の兩町あり、今は合して、宇治山田町といふ。人口二萬九千餘あり。宇治には、內宮ありて、天照太神を祀り、山田には、外宮ありて、豐受太神を祀る。全國各地より、兩宮に賽するもの、頗る多し。宇治の東一里許にして、二見ヶ浦の勝地あり。

山田の東南に、鳥羽港あり。志摩の北端にして、答志島、菅島等、其の

前に横はる。津市を西に距ること、十二里にして、伊賀の上野町あり。人口一萬三千九百餘、其の國の都會なり。

第三章　東山道

第一節　總說

一、位置、廣袤、人口。　東山道は、本州の北部より、中央部に連れる一帶の地方にして、中山道及び奥羽の二部に大別す。中山道は、近江、美濃、飛騨、信濃、上野、下野の六國にして、東海、北陸兩道の間に介在し、奥羽は、磐城、岩代、陸前、陸中、陸奥、羽前、羽後の七國にして、太平洋と、日本海との間に延長す。中山道は、面積二千六百二〇方里、奥羽は、四千二百四十七方里あり。故に、本道の總面積は、六千八百四十九方里ありて、殆ど、全國の四分の一を占む。東西の長き所、二百八十餘里、南北の廣き處、五十三里、人口八百九十一萬八千四百二十四あり。

即ち一方里の住民、僅に、千三百〇二人して、北海道を除きては、人煙最も稀少なる地方なり。

二、區劃。　本道は、近江、美濃、飛騨、信濃、上野、下野、磐城、岩代、陸前、陸中、陸奥、羽前、羽後の十三國を有し、之を九市、百三十七郡に分かち、滋賀、岐阜、長野、群馬、栃木、福島、宮城、岩手、山形、秋田、青森の十一縣にて管轄す。

三、地勢。　本道は、諸道中、最も山岳多き地方なり。中にも中山道の信濃は、諸山脈集合して、本道第一の高地たり。之れに次ぐを、飛騨とす。奥羽の中部も、亦高峻なれども、中山道に比すれば較低し。低地亦所々に在り。中に就きて、奥羽の庄内平地、山形平地、米澤平地、會津平地、盛岡平地、仙臺平地、中山道の兩毛、美濃、近江の平地は、皆肥沃なる原野なり。殊に兩毛の平地は、東海道に續きて、渺漠たる一大原野をなす、所謂關東平原是なり。

四、海岸。　本道は、奥羽地方のみ海に瀕せり、故に名港良泊甚だ多からず。されども、陸奥の内海は、北郡半島、北津輕郡と、左右相對して大灣を成し、灣内又夏泊崎によりて、野邊地、青森の二灣に分かたる。北津輕郡の最北角に龍飛岬突出し、北郡半島は、北端に大間岬、東端に尻矢岬斗出す。尻矢岬は、北海道に渡る航路に當る。仙臺灣は、陸前の南東にあり。牡鹿半島其の北東に突出す。其の岬端に近き海上に奇峯あり、金華山といふ。灣内の松島は、日本三景の一にして、數百の小島點々碁布し、各島皆翠松を生ず、風景極めて佳なり。西岸には、男鹿半島あり、日本海岸唯一の長岬にして、蜿然海に斗出す。其の東南に在る八郎潟は、亦風光絶勝の大灣なり。

五、山嶽。　本道の北部には、阿武隈、北上の二山脈、及び奥羽、那須、岩木の三火山脈あり。何れも、長蛇の如く蜿蜒南走して、信濃に亘る。」阿武隈山脈は、阿武隈川の口より關東平原に連る。脈中の高山には、磐城、岩代の間なる靈山、磐城の笠木山、赤井嶽等あり。北上山脈は、陸奥の東方より、松島灣に至り、其の間に早池峯(六、二七〇)、仙人峠(二、九三〇)、六角牛山(四、三五〇)等の高山屹然として聳えたるあり。奥羽火山脈は、斗南半島の恐山より起り、奥羽の中央を南走し、岩代に至りて、那須火山脈となり、更に西南に進みて、淺間山に連る。此の脈中の重なる山嶽は、陸奥の八甲田山(六、一一〇)、十和田山、羽後、陸中の境なる、森吉山、陸中の七時雨山、岩手山(六、八〇〇)、駒嶽、陸奥の藏王嶽、磐城の刈田嶽、岩代の磐梯山(六、〇七二)、吾妻山(六、三八〇)、安達太郎山、下野の那須嶽(六、三一〇)、男體山(八、二二〇)、白根山、上野の赤城山、榛名山、妙義山等なり。岩木火山脈は、岩木山(五、一六〇)に起り、奥羽の西部に沿ひ、南走して、羽後の森吉山、鳥海山(六、八八五)、羽前の月山(六、七八〇)となり、更に北海道に進みて、飯豐山、御神樂山等となり、上野の境に入りて、白根山となる。

飛驒、信濃地方は山脈諸方より會集して、地形頗る錯雜す。中に就て、北の方、越後、越中の間より來りて、信濃の境を走り、飛驒、美濃に連亘する者を、飛驒山脈と云ふ。脈中に鑓嶽(九、五〇〇)、有明山(八、〇七〇)、鎗嶽(一、一七〇〇)、穂高山(一一、六〇〇)等の高山あり。飛驒山脈の南方に連りて、飛驒、信濃の境に亘れる者を、御嶽火山脈となす。御嶽山(一〇、八〇〇)、乘鞍嶽(九、一〇九)、硫黄嶽(六、七七六)等の高峯聳然として連立せり。御嶽火山脈の東に、木曾川を隔てゝ、木曾山脈あり。惠那山(七、九二〇)、駒嶽(七、八二〇)等は其脈中の高峯なり。木曾山脈の東に、天龍川を隔てゝ相對するは、赤石山脈にして、南の方遠江より來れり。脈中赤石山(一〇、二一〇)を最高とす。南の方、甲斐より來りて、信濃の中央に連れるものは、富士帶の大火山脈にして、白根山(七、〇七〇)、八ヶ嶽(九、六六九)、立科山(八、五四七)、高妻山(七、九八六)等の高峯群峙せり。此の脈は、本邦諸火山脈の結節に當りて、その山勢

頗る峻嶮なり。右の外、尚ほ美濃、飛驒の西境に、寶達山脈あり。荒島嶽、伊吹山等は此の脈中の高峯なり。

六、河流、湖沼。

中山道は、海に接せざる地方なるを以て、其の河流は皆南北に流れて、他道に入り、奥羽は、山脈南北に横亘するが故に、其の河流は大概東西に分れて、海に注ぐ。其の重なるものを擧ぐれば、長良川は、源を美濃の北境に發し、南流して木曾川に合す、此の川鮎を産すること多し。揖斐川は、源を美濃の西北境に發し、尾張の境に至りて、木曾川に注ぐ。木曾川は、源を木曾山中に發し、駒ヶ嶽と御嶽との間を流れて美濃に入り、飛驒川及び長良、揖斐の諸川を合せて、伊勢に入る、其の下流は、舟楫の利あれども、時に氾濫の害を免れず。千曲川の源は、信濃の東南隅にあり、北流して、川中島に至り、犀川を合せて越後に入る。信濃川の長流是なり。岩代の諸水は、合して、阿賀川となりて、越後に入り、下野の諸川は、すべて、鬼怒川

となりて、利根川に入る。其の他、近江の勢田川、野洲川、飛驒の益田川、上野の片品川等は、皆名あるものなり。

奥羽には、北上、阿武隈、最上、御物、能代の五大川あり。北上川(七九)は、陸中の北上山脈に沿ひ、南流して、仙臺灣に注ぎ、阿武隈川(七〇)は、阿武隈山脈の西側に沿ひ、岩代の一部を横ぎりて、荒濱に入り、最上川は、羽前の南境に發して、米澤、及び、山形近傍の諸川を集め、西流して酒田港に注ぐ。其の他、羽後の御物、陸前の名取、廣瀬、陸奥の岩木、八戸等、皆著名の河流なり。

湖沼には、近江の琵琶湖あり。我國第一の大湖にして、周廻七十三里三十一町あり。沿岸風光絶佳なる所少からず。中にも、三井の晩鐘、堅田の落雁、石山の秋月、瀬田の夕照、唐崎の夜雨、粟津の晴嵐、矢橋の歸帆、比良の暮雪等、所謂近江八景是れなり。岩代の猪苗代湖(一六)、羽後の八郎潟、(一五)、陸奥の十和田湖(一五)、信濃の諏訪湖、下野の

中禪寺湖等、亦、皆世に知らる。

七、氣候。 近江、美濃、上野、下野の低地は、大概温暖にして、飛驒、信濃の地は、寒氣烈し。即ち美濃の岐阜は、一年の平均温度十四度三分にして、信濃の長野は十度九分なり。又、奥羽は、一般に寒氣強く、東岸殊に甚だし。即ち福島は、平均十一度六分にして、陸奥の青森は、平均九度一分、羽後の秋田は、十度四分なり。

雨量は、一般に少し。殊に信濃近傍は、最も少し。岐阜、滋賀、秋田等は、稍、多し。降雪は、雨量に反して、一般に多し。中にも、奥羽は、殊に多くして、其の秋田、青森は、積雪丈餘に及ぶと云ふ。

八、物産。 米は、近江、美濃、信濃、下野の平地に多く、奥羽は、土地瘠せ、水利不便にして、未だ開墾せざる處あれども、米作は盛に行はる。其の中、最も産額の多きは、陸前、兩羽にして、磐城、岩代之れに次ぎ、南部、津輕を其の次とす。大豆も、亦、奥羽に多く、稗は、陸中を最とし、麻

は、下野を第一とす。又煙草は、下野、信濃に多く、養蠶は、中山道到る處に行はれ、殊に、上野、信濃の養蠶、製糸業は、我國第一なり。種紙、繭は信濃、岩代に多く磐城、近江、美濃これに次ぐ。

木材は、青森、秋田、岩手の林區ここに廣大にして、下野日光の山林も亦、名木を出だす。又、木曾の山林は、最も良材に富み、美濃の林區も、甚だ狹小ならず。

織物の産額は、上野、下野、岩代を以て第一とし、近江、美濃を第二とす。即ち、中山道にては、近江の長濱縮緬、絹縮、麻布、蚊帳、美濃の縮緬、羽二重、信濃の上田縞、上野の上州絹、伊勢崎織、下野の桐生、足利の縮緬、綸子、緞子、及び木綿織等是なり。又奥羽にては、岩代、川俣の羽二重、二本松紬、仙臺の仙臺平、精好、八端、米澤の絹糸織、秋田の畝織、縞八丈、陸中の南部織等、皆世に知られたる名産なり。陶器の製造は、中山道にては、美濃を最とし、奥羽にては、會津を第一とす。磐城の相馬も、

亦、著名なれども、産額、甚だ多からず。蠟燭は、會津産の名高く、漆器は、會津の會津塗、津輕の津輕塗、羽後、飛驒の春慶塗等、有名なり。紙は、美濃紙その名最も高く、信濃之に次ぐ。又、陸前の埋木細工、美濃の岐阜提灯、傘、油團、飛驒の一位細工等は、皆有名なる産物なり。

鑛物は、奥羽に産出すること、最も多し。即ち金は、陸中の尾去澤其の名高く、岩代、羽後、陸奥之れに次ぎ、銀は、陸中の小阪、羽後の阿仁、院内を第一とす。岩代の半田亦、銀を出だす。銅は、羽後より出づること多く、陸中亦少なからず。鐵は、陸中釜の石、及び仙人より出で、石炭は、磐城より盛に出づ。其の他羽後、陸奥、岩代の硫黄、及び羽後の石油も、亦名あり。中山道にては、飛驒に銀、美濃に銀、銅、鉛等を出だす。而して、下野足尾の銅は、産額の多きこと、我國第一なり。

水産物は、中山道にては、長良川の鮎、琵琶湖の鯉、鮒、其の名世に知らる。奥羽にては、陸前の鮪、鰹、鰈、陸中の章魚、烏賊、陸奥の鯡、鰮、鱈、海鼠、

最も名高くして、産額多し。其の他鮑、鮭は、至る所に産し、製鹽は、陸前の海濱を、最も盛とす。すべて、奥羽は、漁獵の利に富めり。

奥羽は、又牛馬の牧畜、盛に行はれて、其の産額甚だ多し。殊に、陸中、南部の馬は、最も著名なり。陸奥、磐城、信濃も、亦、馬を産すること少からず。

第二節　都邑

一、大津町、及び其の近傍。　近江の大津は、京都を東に距ること三里、琵琶湖に臨みて、勢多川の口にあり。此の地鐵道東西に通じ、湖水の舟運亦甚だ便なり。人口三萬三千餘、滋賀縣廳ありて、近江一國を管轄す。第四師團の衛戍あり、第九聯隊を置く。

彦根は、大津を距ること凡そ十八里、琵琶湖の東岸にあり。人口二萬餘、其の北なる長濱は、縮緬の産地にして、大津と汽船の往來あり、

且つ、東海道鐵道の支線、此の地を過ぐ。米原は、其の東に在り、北陸、東海兩鐵道の分岐する處とす。草津は、大津を東に距る二里餘の處にありて、東海、關西兩鐵道の連續する要所なり。

二、岐阜市、及び其の近傍。　岐阜は、美濃の南部に在りて、北、長良川に臨む。岐阜縣廳ありて、美濃飛驒二國を管轄す。人口三萬二千六百餘、市街繁華なり。

岐阜の西方、凡そ五里にして大垣あり。人口二萬餘を有する小都會なり。其の西方に、關ヶ原の古戰場あり。其の南三里にして、有名なる養老の瀧あり。岐阜を距る十餘里の東南に、多治見町あり、陶器の製造を以て著はる。

高山は、飛驒國に在り、人口一萬四千餘。山間の小都會にして、風景に富めり。其の南に位山あり、水松を以て著る。

三、長野町及び其の近傍。　長野は、信濃の北部にあり、千曲川、そ

の東を流る。人口三萬二千三百餘。長野縣廳此處に在りて、信濃一國を管轄す。此の地、武藏より越後に通ずる、鐵道の衝路にして市街繁昌なり。有名なる善光寺の大伽藍、此の處にあり。長野の南に、川中島の古戰場あり。その南の姨捨山は、觀月の勝地たり。上田は、長野の南方にあり、人口二萬餘蠶糸の業甚だ盛なり。松本は、此の國の中央にあり、長野に次げる都會にして、人口一萬八千餘あり、養蠶の業盛に、市街殷富なり。飯田は、此の國南部の小都會にして、天龍川に沿へり。諏訪湖畔に上下諏訪の兩町あり。

四、前橋市、及び其の近傍。 前橋は、上野の南部に位して、利根川の東岸にあり、人口三萬六千三百餘。群馬縣廳ありて、上野一國を管轄す。製糸業頗る盛にして、市況甚だ殷富なり。富岡製糸場は、市の南方にありて其の名高し。

前橋の西南三里に高崎あり、人口二萬餘、第一師團の衛戍あり。其

の他、桐生、伊勢崎等、皆織物を以て名あり。妙義山の石門、伊香保、草津、磯部等の鑛泉、皆世に著はる。

五、宇都宮、及び其の近傍。 下野の宇都宮は、奥羽街道の要路にして、人口三萬六千餘あり。栃木縣廳ありて、下野一國を管轄す。宇都宮の西南、十六里に足利町あり、織物を以て世に著はる。又、其の北數里に日光山あり、東照宮はじめ、德川氏の祖廟ある處にして、社殿の壯麗なること全國に比なし。山中は、華嚴、裏見、霧降等、著名の瀑布、湯本の温泉、中禪寺湖等、清秀の勝地甚だ多し。日光の南に足尾銅山あり、銅を出すこと最も盛なり。

六、福島町、及び其の近傍。 福島は、岩代の東北、阿武隈川の岸にあり。人口一萬七千餘。福島縣廳ありて、岩代一國、及磐城六郡を管轄す。福島の南に、二本松の名邑あり。若松は、舊と會津といふ。猪苗代湖の西、會津平原の中央にあり。

人口二萬五千四百餘、亦小都會とす。白河は、磐城の西南にあり。昔有名なる、白河の關の在りし所とす。此の他、郡山、須賀川、平、等の名邑あり。

七、仙臺市、及び其の近傍。　仙臺は、陸前の南部廣瀨川の岸にあり。人口七萬六千九百餘、市街繁華にして、本道第一の都會たり。其の城は、伊達氏の築きしところ、今は、第二師團の本營となれり。城畔の躑躅岡は、櫻花の勝地とす。宮城縣廳此處にありて、陸前の一市、十三郡、及び磐城の三郡を管轄す。仙臺の東北に鹽竈あり、鹽竈神社を祀る。有名なる松島は、其の灣内にあり。仙臺の東北凡そ十三里にして、北上川の河口に、石ノ巻港あり。人口一萬七千五百餘。港内水深くして、船舶の碇泊に宜し。其の東南、牡鹿半島の岸に奥濱あり、亦良港なり。

八、盛岡市、及び其の近傍。　盛岡は、陸中の中央部にあり。人口

三萬二千餘、仙臺に次げる都會なり。岩手縣廳ありて、陸中の一市、十一郡及び、陸前、陸奥の各、一郡を管轄す。北方に、安倍貞任の討死せし厨川柵趾あり。其の傍なる中尊寺は、著名の古刹なり。此の國の東海岸に、宮古、釜石の兩港あり。釜石の大鐵坑は、此の西、少許に在り。

九、青森町、及び其の近傍。　陸奥の青森は、本州最北の都會にして、東京、及び函館に通ずる汽船の碇泊處たり。人口二萬三千四百餘。青森縣廳ありて、陸奥の一市七郡を管轄す。第二師團の第四旅團、亦此地にあり。青森の西南に弘前市あり。人口殆ど、三萬一千あり。現今第八師團司令部を置かる。東海岸には、八戸あり、亦名邑とす。

十、山形市、及び其の近傍。　陸前の山形は、最上川の支流の灌域にあり。人口二萬八千五百餘。山形縣廳此の地にありて、陸前一

國、及び羽後の一郡を管轄す。

山形の南に米澤市あり、人口二萬八千七百餘。山形と、その繁盛を競へり。米澤織を産す。又海岸に近く鶴岡あり。人口一萬九千餘にして、交通便利なり。新莊は、國の北部にある小都會なり。

十一、秋田市、及び其の近傍。 秋田は、羽後の西海岸、御物川の河口にあり。人口二萬七千餘。秋田縣廳ありて、羽後の一市八郡及び陸中の一郡を管轄す。舊と、佐竹氏の城地にして、第八師團の第十六旅團を置かる。秋田畝織を産す。此の地の西に、土崎港あり。秋田の南方、十七里に酒田港あり、兩羽地方の要港にして、人口二萬一千餘、市街頗る繁華なり。國の北部、能代川の口に、能代港あり、船舶の碇泊に宜し。

第四章　北陸道

第一節　總說

一、位置、廣袤、人口 東山道の北に位し、日本海に面する、一帶の地方を、北陸道と云ふ、西の一端は、山陰道に接し、其の他は、悉く東山道に連る、地形狹長にして、長さ百三十里、廣さ凡そ二十里、面積一千五百七十七方里、人口三百八十五萬六千〇四十九人、即ち一方里につきて、二千四百四十四人の割合なり。

二、區劃。 北陸道は、若狹、越前、加賀、能登、越中、越後、佐渡の七國にして、之を五市、四十三郡に分かち、福井、富山、石川、新潟の四縣を置きて分轄す。

三、地勢。 本道の南部は、東山道の連山に圍まるゝを以て、土地、自ら高峻なれども、北部は、日本海に向ひて、次第に傾斜せり。故に、海

岸には、平地少からず。越後平原の如きは、凡そ四十里に亘れり。越前、加賀の海岸にも、亦、平地を有す。能登は、海中に斗出せる半島國にして、奇岩、怪石岸に峙ち、風光頗る清秀なり、佐渡は、山多き島國なり。

四、海岸。 本道の海岸は、若狹、越中、能登に於て、屈曲多く、其の他には、大なる出入なし。若狹の、小濱灣は、松ヶ崎、赤礁崎、左右に突出して灣入甚だ大なり。又越前の立石崎は、海中に斗出すること、殆ど三里、燈臺の設あり。敦賀港は、此の灣中にありて、北陸の要港たり。是れより北に方りて、阪井、金石等の諸港あり。能登半島の端に、綠剛、珠洲の二岬あり。其の東南の灣入する處を、七尾入江と稱し、七尾港其の内にあり。能登半島の東にありて、越中に灣入するものを、越中灣と稱す。灣内に伏木の良港あり。越後は海岸頗る長し。中に就きて、直江津、新潟の二港を最も著名の良港とす。すべて本道

の海岸は嶮峻にして、間々交通に困難なる所あり。殊に、越後、越中の界には、親不知と稱する所あり、古來有名の難所たり。

五、山嶽。 本道は、東山道の境に、高山、峻嶽連亘せり。即ち越後の境には、岩木火山脈横はり、羽前の境には、鷲巣山、飯豊山聳え、岩代の境には、御神樂嶽、淺草山、守門嶽、駒形山、八海山(六一〇五)等、幷び立て り。彌彦火山脈は、信濃の境にて、妙高山、燒山、黑姫山、大蓮華山(九、八七一)の如き高山を起こし、越後にて彌彦山、米山等を起こす。越中は崢嶸なる信濃、飛驒の兩國に界せるを以て、高山重疊し、立山(九、八〇〇)、最も高し。加賀と越前の間には、白山火山脈あり。白山は脈中の高峯なり。越前には大日嶽、若狹に青葉山あり、皆、高峯とす。白山火山脈と交叉して、南北に走れる山脈は、能登の寶達山より起り、越中、加賀の境に蟠りて、礪波山を起し、遂に東山道に入りて、近江、美濃の境に亘る。能登火山脈は、隱岐より來り、能登に入りて、鷹爪、

高洲の諸山となり、佐渡に渡りては、名高き金北山となる。

六、河流。 河流は、皆、其の源を南方の山脈間より發し、北流して日本海に注ぐ。故に長流甚だ少なし。然れども信濃川は、信濃より發し、越後の中央を横ぎりて、日本海に入り、其の長百里、幅八町、汪洋として、三十五里の間船舶を通ずべく、支流亦甚だ多くして、八千八水河の稱あり。越後の新潟、三條、長岡は、此の灌域にあり。岩代の日橋川、亦、此の國の北部に來りて、海に注ぐ。此の國にて、之れを阿賀川(五七)と稱す。射水、神通、黒部、常願寺の諸川は、越中の四大河なり。皆、北流して海に入る。就中、神通、射水の二川、最も長流なり。此の他、加賀の手取川、越前の日野川を大なりとす。越後の信濃川、越中の四大河、及び加賀の手取川、越前の九頭龍川(日野川)は、本道の七大河と稱せらる。

本道の沿岸には、潟と稱するもの多し。潟とは、砂石の積りて、河口を遮ぎり、水を湛へて、沼となれるものなり。越後の福島潟、越中の放生津潟、加賀の河北潟、柴山潟、越前の北潟の如き、是なり。

七、氣候。 本道は、北、日本海に面して、直ちに、亞細亞大陸の、寒氣を受くれども、對馬暖流の爲めに、其の寒氣を幾分か調和せらるゝを以て、割合に寒冽ならず。又、本道の各地に就きて言へば、能登より西南の地は、温暖にして、東北の地は寒冷なり、特に、越後は、寒氣甚だしくして、積雪、人家を埋むることあり。又、加賀、越前の間なる、牛首村は、冬季に至れば降雪を畏れて、村を去るものありと云ふ。一年の平均温度は、金澤、十三度一分、伏木、十三度二分、新潟、十二度六分なり。

風位は、西北風多し。冬季は、日本海より、水蒸氣を運び來るが故に、降雪頗る多し。されば、一年の雨雪量は、其の夥多なること、全國中第一なり。而して其の降雨季、他地方と異にして、夏より秋に至る

までは、降雨少く、數旬の間、殆ど雨滴をも見ざることあれど、十一月より一月に及びて、降雪頗る多く、越後の如きは、積雪人家を埋むるに至る。

八、物産。 本道は、土地概ね肥沃ならずと雖、越前、越後、加賀等には、豐饒なる耕地あり。農産の重なるものは、米にして、麥は、甚だ稀なり。米の産額多きは、越後にして、越中、加賀、能登等之れに次ぐ。茶は、能登、佐渡を除くの外、至る所に産すれども、若狹、越前、最も多し。煙草は、越前、加賀、越中より多く出で、麻は、越前、加賀、越後に多く産し、蠶業は、越中、越後最も盛なり。又、各國の山中より、木材獸皮を出だすこと多し。織物の名あるものは、越前の奉書紬、蚊帳、加賀の絹、越中の木綿、越後の縮、數寄屋、櫟尾紬、太織、五泉の精好平、糸織、十日町の絹縮等なり。陶器は、加賀の九谷燒最も名高く、佐渡燒、亦有名なり。漆器は、若狹の若狹塗、能登の輪島塗、頗る著名にして、越後の漆器、亦世に知らる。金物は、金澤の象眼細工、越中高岡の銅器、越後の三條、及び越前竹生の鐵器、共に名産なり。

金は、佐渡の金北山、最も多く産出して、殆ど全國産額の三分の一を占む。銀は、佐渡の相川、越前の面谷に産し、銅は加賀の尾小屋、越前の草倉より出づ。其の他、越中の藥種、硫黃、越前の奉書紙、鳥子紙、越後の石炭、石油、若狹の瑪瑙、碁石等、皆著名の物産なり。

海産物の多きは、越後、越中を最とす。中にも、越後の鮭、越中の鰮、鱈、烏賊、若狹の鯛、越前の雲丹、佐渡の鰯、最も著名なり。製鹽業は、能登に盛に行はる。

第二節　都邑

一、金澤市、及び其の近傍。 金澤は、北陸道第一の都會、人口八萬九千九百餘。北に、金石港を控へて、市況頗る盛なり。石川縣廳あり

て、加賀、能登の二國を管轄す。第九師團司令部こゝに在り。其の地の兼六園は、有名なる公園なり。

大聖寺町は、越前の境に接して小繁華をなせり。陶器を以て有名なる九谷、及び温泉を以て知られたる山代、山中は、共に、その近傍にあり。小松も、亦小都會なり。

金澤より北に進みて、能登に入れば、東七尾灣に沿ひて、七尾町あり、北海に航する碇泊所なり。其の北に輪島あり、亦船舶の寄る所にして、漆器の産地なり。

二、富山市、及び其の近傍。富山市は、越中の中央に位して、神通川の東岸に臨めり。人口五萬八千餘。富山縣廳ありて、越中一國を管轄す。此の地は、古より、賣藥行商の多く出づる所なり。

高岡市は、富山に次げる都會にして、富山の西六里にあり。人口三萬餘。銅、鐵器の製造盛なり。特別輸出港なる伏木は、市の北方なる、海岸に在り。

三、新潟市、及び其の近傍。新潟は、信濃川の河口に在り。人口五萬餘、五港の一なり。されども、信濃川の泥砂年々堆積して、河口次第に淺く、且つ風波常に荒くして、大船の碇泊に便ならず。故に貿易は、甚だ盛ならず。新潟縣廳此の處に在りて、越後、佐渡二國を管轄す。

新潟の東南に五泉あり、五泉平を出だす。東方、阿賀川の北に新發田あり、第二師團の第十五旅團を置く。信濃川の岸に、長岡あり。其の西に高田あり、人口二萬餘、冬時の積雪最も深き所とす。高田の北に直江津あり、北海の要津なり。其の他、三條、與板、柏崎、出雲崎等あり。又、小千谷は、越後縮の産地として、世に知らる。佐渡には、相川と云ふ小都會あり、人口一萬五千二百餘を有す。又夷、小木の兩港あり。

四、福井市、及び其の近傍。　福井市は、越前の北部に位し、人口四萬三千二百餘、繁華の都會なり。　市街は、足羽川に跨り、九十九橋を以て之れを連ぬ。　市の西部に藤島神社あり、新田義貞を祀る。　福井縣廳こゝにありて、若狹、越前の二國を管轄す。

福井の北方、日野川の河口に、阪井港あり、船舶の出入極めて多し。

武生、鯖江の兩町は、福井の東五里にあり。

敦賀は、越前の西に在りて、敦賀灣に臨む、人口一萬六千餘あり。　灣內水深くして、北陸第一の要港たり。　第九師團の第十八旅團を置く、其の北に金ヶ崎の城趾あり。

小濱は、若狹の中央に在りて、小濱灣に臨む。　灣內、常に船舶多し。

第五章　山陰道

第一節　總說

一、位置、廣袤、人口。　山陰道は、本州の西部に在りて、北は、日本海に臨み、東は、北陸道及び畿內に連り、南と西とは、山陽道に接す。　東西の長さ八十里、南北の廣さ二十里、面積一千八十七方里、人口一百八十一萬九千四百二人、即ち一方里に付き、一千六百七十三人の割合なり。

二、區劃。　山陰道は、丹波、丹後、但馬、因幡、伯耆、出雲、石見、隱岐八國に分かれまた二市、三十九郡に分かつ鳥取、島根二縣之れを管轄す。

但し丹後一國、丹波五郡は、京都府に屬し、但馬一國、丹波二郡は、兵庫に屬す。

三、地勢。　本道は、中國山脈を以て、山陽道と表裏を爲すが故に、南方は、地勢自ラ高く、北方は、日本海に向ひて、漸く低下せり。　全道一體、山多くして平野少く、唯、海岸の所々に、狹少なる耕地あるのみ。

隱岐は、火山脈の噴起したる島國にして、島後、西島、中島、知夫里島の

四島と、數多の小島とより成る。中、西、知夫里三島は、島後に對して島前といふ。島中數座の火山あり、能登の火山脈に連る。

四、海岸。 丹波一國の外、各國日本海に瀕すれども、海岸の出入極めて少し。只、丹後のみは、灣入頗る深くして、與謝海の岸に、舞鶴、由良、宮津の良港あり。天橋立は、與謝灣内に斗出せる、一里餘の沙洲にして、青松白沙、風景絶佳、日本三景の一とす。伯耆に、米子及び境あり、共に良港なり。出雲に、島根半島あり、沿岸の風色甚だ佳し。半嶋の東端を地藏鼻と稱し、西端を宇龍岬と稱す。其の南に杵築港あり。中海は、此の半島と、伯耆の一角とに包まれたる入海なり。石見の海岸に濱田港あり、亦良港とす。

五、山嶽。 本道の山脈に二派あり、一は、中國山脈にして、一は、白山火山脈なり。中國山脈には、石見、周防、安藝の境に鬼ヶ城山あり。出雲、伯耆、備後の境に三國山(サンガクニヤマ)あり。伯耆、因幡、美作の境に三國山(ミクニガヤマ)あり。

因幡、美作、播磨の境に志戸坂峠等あり。又、丹波に大江山、三國山あり。是れ等、諸山の間を横斷して、山陽道に出づる通路少からず。白山火山脈は、中國山脈の北に並行す、其の東部に火山多し。重なる山嶽は、石見、出雲の境に三瓶山(三八七〇)、伯耆に大山(五、八七七)等あり。大山は、本道第一の高山とす。此の山脈は、是れより東に延び、丹後に至りて二派に分かれ、一は、海に入り、一は、若狹の境を走りて白山に連る。此の山脈の近傍に温泉多し。丹後の鹽崎、但馬の湯嶋、因幡の岩井等を著名とす。

六、河流。 本道は、地域狹少なるを以て、大河長流少し。江川(五〇)は石見川ともいふ、源を備後に發し、山脈の間を貫流して石見に入る、本道第一の長流なり。此の川上流は、三次(ミヨシ)川といひて、安藝、備後の諸流を合せ、下流は、運送の便多し。簸川(二〇)は、江川に次ぐ河流なり。出雲西部の諸流を合せて、宍道湖に入る。丹波の保津川は、

東流して山城に入り、和知川は、音無瀬川とも稱し、丹後に入りて由良川となる。　千丈瀑は、此の支流にあり。　但馬の朝來川、石見の高津川、伯耆の日野川、皆、有名なる河流なり。

出雲の宍道湖は、本道第一の大湖にして、周廻十三里餘あり。　風光明媚にして、多く鱸を産す。　本道も、亦北陸道の如く、潟と稱する者多し。

七、氣候。　本道の氣候は、丹波最も寒く、是れより西方に至るに從ひて、次第に温暖なり。　伯耆の境港は、平均温度十四度三分にして、石見の濱田は十四度五分なり。　之れを他地方に比すれば、山陽道よりは、寒く、北海道よりは、温暖なり。

北西風の日本海より、水蒸氣を吹來ること、北陸道に同じ。　されども、雨量は、彼れに及ばず。　降雨季節は、秋と冬となり。

八、物産。　米は、因幡、伯耆に産し、養蠶は、丹波、丹後、但馬に行はれ、麻、

藍、綿は、各地に栽培せらるれども、伯耆、出雲の綿、出雲、石見の麻、其名高し。　茶、煙草及び果實は、丹波に多く、蜂蜜は、本道の特産なり。

織物は、丹後、但馬の木綿、最も盛にして、丹後縮緬、伯耆、出雲の木綿、石見の紙布等、亦著名なり。　製紙は、各地に行はるれど、石見より出だすこと多し。　柳行李は、但馬の特産とす。

金銀は、但馬の生野を第一とし、鐵は、石見、出雲を最も多しとす。　何れも砂鐵なり。　石見は、又銀、銅を産し、出雲は、銅をも出だす、　石炭と水晶とは、伯耆に産し、瑪瑙は、出雲より出づ。

海産物は、風濤荒きを以て其の收獲多からず。　然れども、隱岐、出雲よりは、烏賊、鯛、鰮等を出だすこと多し。　隱岐は、又鯖、鰯、干鰻をも出だす。　伯耆には、白珊瑚を産す。

牧牛は、各地に行はるれども、但馬の牛、最も名高し。　世に神戸牛と稱するは、大抵此の地方より出づるなり。

第二節　都邑

一、宮津町、及び其の近傍。　宮津は、丹後の與謝海に臨む。港内水深くして、大船の碇泊に宜し。人口一萬に滿たざれども、市況繁華なり。日本三景の一たる天橋立は、此の近傍に在り。宮津の東六里許に舞鶴港あり、海軍鎭守府の豫定地なり。

丹波は、北西部に福知山町、東南部に龜岡町あり。福知山は、京鶴鐵道の線路に當りて、第十師管の第二十旅團の在る處なり。

但馬には、豐岡あり。又其の東南に出石あり。共に國中の都會とす。湯島は、有名なる溫泉場にして、浴客常に多し。豐岡より、播磨に通ずる所に生野あり、金銀を產するを以て世に著る。

二、島取市、及び其の近傍。　島取は、因幡の東部、千代川の下流に在り。人口二萬七千七百餘、繁華なる小都會なり。島取縣廳此の

所に在りて、因幡、伯耆二國を管轄す。

米子は、伯耆の深浦に在る港にして、人口壹萬四千九百餘あり。其の北方の長く海中に斗出するものを夜見濱とす。其の北端なる境港は、本道第一の良港にして、西は、赤間關、東は敦賀、伏木、新潟と汽船の往來頻繁なり。

三、松江市、及び其の近傍。　松江は、宍道湖の東岸に在り。人口三萬五千二百餘、山陰道第一の都會なり。島根縣廳此の所に在りて、出雲、石見、隱岐三國を管轄す。松江の西北に杵築あり、出雲大社の在る所にして、參拜の旅客常に多し。

濱田は、石見の小都會にして、船舶の碇泊場たり。其の西南の山間に、津和野あり。

隱岐は、西島に、後醍醐天皇、黑木御所の舊趾あり。中島に、後鳥羽上皇の御陵あり。島後の南岸なる西郷港は、船舶の碇泊する所とす。

第六章　山陽道

第一節　總說

一、位置、廣袤、人口。　山陰、山陽兩道は、合して中國と稱す。　山陽道は、東は、丹波、攝津に連り、北は、山陰道に接し、西は、早鞆海峽を隔てゝ九州と相對し、南は、瀨戸內海を隔てゝ四國と相望む。　東西の長百七里、南北の廣さ十五里、面積凡そ千五百七十方里、人口四百十七萬四千四百八十二人、即ち一方里につきて、二千六百五十八人の割合なり。

二、區劃。　山陽道は、播磨、美作、備前、備中、備後、安藝、周防、長門の八國に分かれ、更に又四市、七十七郡に分かる。　岡山、廣島、山口の三縣之れを管轄す。　但し、播磨一國は、兵庫縣に屬す。

三、地勢。　山陽道は、北に中國山脈を負ひて、概ね山地なりと雖、山陰

道に比すれば、稍平地多し、　殊に、播磨と、安藝とには、肥沃の平地少からず。　交通は、海陸ともに頗る便利なり。

四、海岸。　本道は、美作一國の外、皆瀨戸內海に臨みて、海岸に小出入多し。　就中、兒島灣、廣島灣、最も大なりとす。　兒島灣は、備前、備中の海岸に在り、兒島半島其の前面を擁す。　兒島半島は、備前の一部にして、備中の南端より東に出で、備前の沖を繞る。　廣島灣は、安藝の南隅に在り。　嚴島、江田島等、遙に相對して、其の口を扼す。　灣の東に吳港あり。　其の他、備中には、玉島港、笠岡港に相並び、備後には、鞆、尾道の二港相連る。　周防には、室津崎突出し、其の內に室津、岩國、三田尻等の良港あり。　長門の赤間關は、日本海と周防灘との間に在る要港なり、

瀨戸內海は、各處に於て其の名稱を異にす。　播磨に播磨灘と云ひ、備中に水島灘と云ひ、備後に燧灘、周防に周防灘と云ふ。　而して、內

海の東口を、明石海峽と云ひ、西口を、早鞆海峽と云ふ。　早鞆海峽は、赤間ヶ關の在る處にして、其の幅、僅に十餘町なり。　海上は、數多の島嶼星列して、兩岸の連山と相映ず。　其の風景畫の如し。

五、山嶽。　中國山脈は、九州より長門の赤間ヶ關に入り、龍王及び鬼ヶ城の二山となり、周防の境を東走し、山陰、山陽の間に走り、播磨の北方に至りて、丹波に入る。　脈中主要なる山嶽は、既に山陰道の部にて述べたれども、尚ほ其の條派に方れるものを擧ぐれば、備後に御神山あり、備前と播磨との境に船阪山あり、船阪山は、後醍醐天皇の事蹟を以て著る。　本道は、火山脈少なければ、温泉少く、地震亦、稀なり。

六、河流。　本道の河流は、概ね北方の山脈間より發して、瀨戸内海に注ぐ。　播磨に加古川あり、其の國の東部を流る。　其の西に揖保川、千種川等あり。　美作には、東に津山川(三一)、西に高田川あり。　共に

備前に入り、一は、吉井川、一は、岡山川となりて、兒嶋灣に注ぐ。　備中の高梁川(二八)は、一に大河と稱す、國内第一の大河なり。　備後に三次川、蘆田川あり。　三次川は、北に分かれて江川となる。　其の他、安藝に太田川、周防に岩國川等あり。

七、氣候。　本道は、山陰道に比すれば、遙に温暖にして、降雪少し。是れ、北に山脈を負ひ、南に海を控ゆればならん。　然れども、北方山間の地方に至れば、寒氣漸く强し。　一例を示せば、廣島は、平均温度十四度六分、赤間ヶ關は、十五度一分なり。

風は、概ね穩和なり。　瀨戸内海の如き、颶風甚だ稀にして、舟行頗る安しといふ。　雨は、周防、長門二國は多量なれども、内海の沿岸は、概して少量なりとす。　殊に三備の如きは、降雨最も少くして、製鹽の業に宜し。

八、物産。　地味概ね肥沃にして、至る所五穀、成熟す。　殊に、播磨は、

農産物多し。綿は、播磨、備前、備中、安藝、周防等に多く、煙草は、各地に産すれども、三備と、播磨とを殊に多しとす。茶及び果實は、共に各地に適して、收穫甚だ多し。但し、養蠶の業は、未だ盛に行はれず。木綿織は、播磨、三備、周防を産地とすれども、岩國縮、明石縮、其の名特に著る、麻布、蚊帳は、安藝より出づ。陶器は、備前の伊部燒、最も名高く、疊表は、備後表の名世に著し。其の他、三木の刃物、姫路の製革、龍野の醬油、長門の鹿子絞、鞆津の酒、長船の刀劍、等皆名物ならざるはなし。

鑛物は、播磨に銀を産し、備中、美作に銅を出だす。鐵は、安藝、備後に多く、石炭は、長門に多し。備前の蠟石、赤間關の硯石、其の名、亦著る。海産物は、長門、周防の海岸に、鰮、鯛、鰕、海參、牡蠣、章魚、烏賊を産すること頗る多く。播磨の鰻、廣島の牡蠣、長門の鯨等、亦各、有名なり。製鹽は、各地に行はるれども、赤穗鹽の名、最も世に著る。

又各地に、牧牛の行はるゝこと、奥羽の牧馬に劣らず。

第二節　都邑

一、姫路市、及び其の近傍。

播磨の姫路は、神戸の西十四里に在り。人口三萬一千餘、中國の要衝に當りて、市街繁華なり。第十師團の司令部を置く。姫路革を名産とす。

播磨の西南隅に、赤穗あり、多く鹽を産す。之れを赤穗鹽と云ふ。明石は、播磨の東端なる海濱に在り。人口二萬餘、山陰道に通ずる咽喉なり。縮布を産す。此の邊は、有名の勝地にして、須磨、明石、舞子等、風光の明媚なること、三景に讓らず。其の近傍に、飾磨津、龍野、高砂等の名邑あり。龍野は、醬油を名産とし。高砂は、松の名所なり。」

二、岡山市、及び其の近傍。

岡山川に臨む。南方兒島灣を距ること、遠からざるを以て、水陸運

輸の便あり。人口五萬二千三百餘、商業繁華なり。後樂園は、有名の公園なり。岡山縣廳此の地に在りて、美作、備前、備中三國を管轄す。」岡山の北方、美作の中央に津山あり。人口一萬二千六百餘、美作第一の都會なり。備中大川の下流には、東に倉敷あり。西に玉島あり。玉島は、水深くして、船舶の碇泊に便なり。笠岡も、亦西部海濱に在る良港なり。

三、廣嶋市、及び其の近傍。安藝の廣島は、太田川に誇り、交通頗る便利にして、市街甚だ繁盛なり。人口九萬壹千九百餘、山陽道第一の都會とす。廣島縣廳此の所にありて、備後、安藝二國を管轄す。第五師團司令部、亦此の地に在り、征清の役に大本營を置かれし所なり。

廣島の南一里に、宇品港あり。其の東南に吳港あり。吳港は、第二海軍鎭守府の在る所にして、倉橋、能美二島に包まれ、音戸瀨戸を入口とし、要害最も良き地なり。能美島の北を、江田島といふ、海軍兵學校こゝに在り。嚴島は、廣島の西南海上に在り、島に、市杵島神社あるを以て、宮島ともいふ。神社は、水に臨みて造營せらる、潮滿つる時之れを望めば、恰も波間に浮ぶが如し。風景秀美、三景の一たるに愧ぢず。

備後の福山は、人口壹萬五千四百餘を有す。尾道は、山陽道著名の良港にして、人口壹萬九千六百餘あり。鞆、津、三原も、亦良港とす。此の邊、水碧に、砂白く、風景極めて明媚なり。

四、山口町、及び其の近傍。山口は、周防の西境に在り、四面山を繞らして、頗る要害の地とす。人口一萬五千餘、小都會なり。第五師團の第二十一旅團を置く。山口縣廳亦こゝにありて、周防、長門二國を管轄す。

山口の南五里に、三田尻の良港あり。市街、宮市と相連りて、繁華な

り。其の東に德山あり。又岩國川の口に岩國あり、錦帶橋の名、世に著る。

赤間關は、馬關又下の關と稱す。長門の西南岸にありて、早鞆海峽に臨み、瀨戸內海の咽喉を扼す、國防の要所たり。人口三萬五千三百餘、特別輸出港にして、市況殷富なり。廿七、八年の役に、講和談判を開かれしは、此の地なり。源平の古戰場たる檀浦は、其の東の海上に在り。萩は、此の國北部の都會にして、人口一萬八千餘を有す。

第七章　南海道

第一節　總說

一、位置、廣袤、人口。　南海道は、四國、淡路の二島及び紀伊一國より成り、數百の島嶼、其の周圍に散在す。紀伊は、本州に在りて、東西南の三面は、海に臨み、北は、伊勢、大和、河內、和泉に接す。四國島は、東は

紀伊海峽を隔てゝ、九州島に對し、南は、直に太平洋に面す。淡路島は、紀伊水道の北に當りて、四國島と、中國との間に在り。本道は、面積千五百六十一方里、人口三百六十四萬一千五百九十八人、即ち方里につきて、二千三百三十二人の割合なり。

二、區劃。　本道は、紀伊、淡路、阿波、讃岐、伊豫、土佐の六國に分かれ、更に又五市、五十二郡に分かる。和歌山、德島、香川、愛媛、高知の五縣、之れを管轄す。

三、地勢。　本道の地形は、三個に隔絕せりと雖、其の地脈は、同一なり。紀伊は、概ね山地にして、平野少し。四國島は、山脈東西に走り、河流其の間より發して、四方に分流す。內地は、山嶽多しと雖、海岸には、多少の平地あり。殊に、瀨戸內海に面する地方は、耕地よく開けて、地味肥沃なり。

四、海岸。　紀伊の海岸は、港灣の出入少し。國の南端を、潮岬と云

ふ、此の處に燈臺あり。此の岬より東北の沿岸を、熊野浦といひ、其の海を、熊野灘といふ。熊野浦を西に廻れば、田邊、和歌山の二小灣あり。加太岬は、國の北端に在り。

四國の沿岸は、屈曲甚だ多くして、大小の岬灣少からず。東方に突出して、紀伊水道を扼するは、蒲生田岬にして、西方に長く出でゝ、速吸海峽を爲すは、佐田岬なり。此の兩岬の南には、室戸岬、蹉跎岬ありて、土佐灣を抱く。其の長さ一百餘里、灣內に須崎、浦戸の二港あり。蹉跎岬と、佐田岬との間は、港灣の出入極めて多しと雖、船舶の碇泊に便なるは、唯、宇和島灣あるのみ。又、佐田岬の北より、三津濱に至るまでは、出入少くして、殆ど一直線をなす。其の海を硫黃灘、又は、伊豫灘といふ。其の北方なる楫取岬は、讃岐の箱崎と相對して、一大灣をなす。其の沿海を燧灘、備後灘といふ、無數の小島海上に散在す。箱崎の東なる、讃岐の海岸も、亦小出入多くして、多度津、

高松の二良港あり。其の海上に小豆島あり。淡路は、地勢狹長にして、北端は、明石海峽を隔てゝ播磨に對し、東方は、由良崎突出して、紀伊の加太岬と、由良海峽を挾む。其の西南に、阿波の鳴門あり。鳴門は、潮流急激にして、海水渦を卷き、舟行甚だ危險とす。

五、山嶽。 四國山脈は、伊豫の西岸より起り、伊豫、土佐兩國の境を亘り、阿波の中央を通り、紀伊水道を過ぎて紀伊に入る。此の山脈に、數條の支脈あり。其の中の最も著きものは、阿波、讃岐の界を亘り、進みて淡路に入り、遂に攝津の西境に至る。此の脈中にて著名なる山嶽は、四國にては、伊豫、土佐の境に石槌山(六、四七二)、瓶森山、鬼城山あり。阿波、讃岐の境に、雲邊寺山あり。阿波の中央に、燒山寺山あり。其の西に劒山(六、一一二)、旭丸山(四、七五〇)あり。又紀伊には、南部に那智山、大塔峯あり。那智の山中に、那智、瀧あり、懸崖よ

り下ること四十餘丈、本邦第一の大瀑布なり。火山脈は、豐後より來りて伊豫の高縄山、讃岐の象頭山等を噴起す。象頭山の琴平神社は、社殿壯麗にして、賽人常に絶ゐず。

六、河流、 四國にて、河流の最大なるは、吉野川(四二)にして、四國三郎の稱あり。其の源を、土佐の瓶森山に發し、東流して阿波に入り、伊豫川、其の他の諸水を集め、吉野川平原を直流し、德島の北に至りて海に注ぐ。渡川は、一に四萬十川と云ふ。伊豫西南の山間より出で、南流して土佐に入り、西部の諸川を合して、下田の海に入る。仁淀川は、伊豫の國境より發し、物部川は、阿波の國境より出で、共に土佐に入りて、土佐灣に注ぐ。那賀川は、阿波、土佐の山間より發し、東流して中島浦に注ぐ。其の他、伊豫に重信川、肱川等あり。紀伊は、河流甚だ多し。熊野川(三七餘)は、大和の十津川の下流にして、北山川、其の他の諸水を集めて、熊野浦に注ぐ。紀伊、川(四七)は、大和の吉野川の下流にして、紀伊の北邊を西流し、和歌山の北に至りて、海に入る。其の他、有田川、日高川、安宅川は、皆、大和國境の山間より出でゝ、紀州灘に注ぐ。

七、氣候。 本道の氣候は、概ね溫暖にして、略、山陽道に同じ。殊に、紀伊と土佐とは、最も溫暖なり。高知は、平均溫度十五度五分、和歌山は、十五度三分なり。雨量も亦、豐富なり、就中、高知の如きは、全國第一に位す。但し伊豫、讃岐二國は、山北に位するを以て、山陽道と等しく少量なり。

八、產物。 本道は、地味概ね肥沃にして、農產物多し。然りと雖、米田少くして、麥圃多し。又伊豫、土佐にては多く玉蜀黍、甘蔗を植う。紀伊の密柑、阿波の藍、土佐の半紙、鰹節は、本道著名の產物にして、伊豫別子の銅、及び安質母尼、紀伊と小豆島との石炭、紀伊のフランネル、雲齋織、高野紙、黑江塗、土佐の珊珊、眞珠、阿波の齋田鹽、淡路の伊賀

野燒、伊豫の製紙、松山縞、讃岐の保多縞、砂糖等も、亦皆世に知られたる名物なり。又、材木は、紀伊より出づるもの多く、牧畜は、土佐駒の名世に著る。

海産物は、到る處に多しと雖、殊に紀伊、土佐の海に多し。土佐の鰹、伊豫の鰮、紀伊の鰤、石花菜等、有名なり。熊野沖と、土佐沖とには、鯨漁盛に行はる。

第二節　都邑

一、和歌山市、及び其の近傍。　和歌山は、紀伊國の西北隅、紀伊川の口に在り。大阪を距ること十七里、水陸交通の便多し。人口五萬五千七百餘、商業繁盛なり。紀州フランネルを産す。和歌山縣廳は、此の處に在り、紀伊の一市七郡を管轄す。和歌山の南一里許に和歌浦あり、風光明媚の勝地とす。湯淺、田邊、新宮、尾鷲は、海濱の名邑にして、皆小繁華の地なり。湯淺の近傍は、有田蜜柑の産地とす。十津川の下流に、本宮の温泉あり。其の他龍神、神塲、湯崎等の温泉、亦、世に著る。

二、德島市、及び其の近傍。　德島は、阿波の東海岸吉野川の口に在り。人口六萬一千餘、大阪、神戸との交通甚だ便利にして、商業の繁盛なること四國第一とす。德島縣廳は、此の處に在りて、阿波一國を管轄す。

三、高松市、及び其の近傍。　高松は、讃岐の北海岸に在りて、瀬戸内海の要港とす。人口三萬四千六百餘、市況繁盛なり。鐵道なりて西讃に達すべし。香川縣廳此の處に在りて、讃岐一國を管轄す。高松の西に丸龜あり、人口一萬九千三百餘を有す。第十一師團司令部の所在地なり。其の西の多度津は、繁華の港にして、是れより琴平神社に到る鐵道あり。此の他、坂出、觀音寺等の名邑あり。高

松の近傍に志度浦あり、舟泊常に多し。志度の西北に屋嶋あり、源平の古戰場にして、內裏の跡、今尙ほ存す。

四、松山市、及び其の近傍。 松山市は、伊豫の西南岸に在り。人口三萬四千五百餘、繁華の地とす。第十一師團の第二十二旅團を置く。愛媛縣廳亦此の處に在りて、伊豫一國を管轄す。松山の西一里餘にして、三津濱の要港あり。又、其東に道後の溫泉あり、浴客常に多し。此の所と、三津濱との間に鐵道あり。松山の南に宇和島あり、北に今治あり、共に舟泊の要地とす。其の他、大洲、八幡濱、小松、西條等は、皆名邑なり、別子の銅山は、松山の東、土佐の國境に在り。

五、高知市、及び其の近傍。 高知は、土佐の浦戸灣に臨む、人口三萬七千餘、商業繁盛なり、高知縣廳此の處に在りて、土佐一國を管轄す。中村は、此の國の西部に在る都會にして、須崎は、中部海岸に在る要港なり。其の他、伊野、高岡等は皆、名邑にして、何れも、紙を產すること甚だ多し。

六、福良町、及び其の近傍。 福良は、淡路の西南隅に在る小都會にして鳴門海峽を隔てゝ阿波に對す。其の東に洲本あり、亦小都會なり。洲本の東南由良の海峽なる友か島には、砲臺ありて、大阪灣の口を扼す。

第八章　西海道

第一節　總說

一、位置、廣袤、人口。 西海道は、九州島と、壹岐、對馬、琉球の諸島とより成る。其の北東は、早鞆海峽と、速吸海峽とを隔てゝ、中國及び四國に對し、東南は、渺茫たる太平洋に面す。而して琉球諸島は、遠く西南に連りて、臺灣に近づき、對馬、壹岐は、一葦帶水を隔てゝ、朝鮮國を望む。面積二千六百十七方里、人口五百九十四萬九千二百十四

人、即ち一方里につき、二千二百七十三人餘の割合なり。

二、區劃。　本道は、豐前、豐後、筑前、筑後、肥前、肥後、日向、大隅、薩摩、壹岐、對馬、琉球の十二國に分かれ、更に琉球の外を、六市八十郡に分かち、外に琉球國二區五郡あり、福岡、大分、長崎、佐賀、熊本、宮崎、鹿兒島、沖繩の八縣、之れを分轄す。

三、地勢。　本道も、亦山多くして平野少し。唯、筑紫平原は、筑後、肥前、肥後三國に跨りて、稍、廣大なり。其の他は、福岡の近傍、豐前の海岸等に、小平野あるのみ、河流は、中央の山脈より發して、四方に分流す。

四、海岸。　本道の海岸は、西部に於て、屈曲極めて多し。大小數多の屬島、其の周圍に散在す。肥前の西北海岸には、東松浦、北松浦の兩半島ありて、其の間に伊萬里灣を抱く。北松浦半島の西に、平戸、瀨戸を隔てゝ平戸島あり。其の西南に、宇久島、中通島、奈留島、久賀

島、福江島あり。之れを、肥前の五島と稱す。鯛浦は、一に大村灣と稱し、東西彼杵郡の間に灣入す。此の灣の入口に、佐世保軍港あり。筑紫潟は、有明海ともいひて、肥前、肥後、筑後の間に深く灣入す。島原半島と、天草島と相對して、其の海門を扼す。其の間を、早崎瀨戸と云ふ。島原、西彼杵、兩半島の間に、又一半島あり、其の端を野母崎と云ふ。長崎港、此の半島の頸部に在り。天草島は、上下二島あり。其の西の西の海を、天草灘と云ふ。天草島の南に長島あり。又、其の西南、薩摩の海上に甑島あり。薩摩、大隅は、共に半島を爲して、鹿兒島灣を抱く。灣内に櫻島聳ゆ。薩摩半島の東南端を、開聞岬と云ふ。其の西端に野間岬あり。大隅半島の南端は、佐多岬にして、其の海上に、種子、屋久、大島、德島等、大小二十餘の島嶼羅列す。之れを、大隅諸島と云ふ。大隅半島の東端に大崎あり。日向の南端、都井岬と相望みて、志布志灣を抱く。都井岬の北、日向の海上を日向灘と稱

す。其の海岸は、殆ど一直線にして、港灣に乏し。唯、細島は小港なれども、船舶の常に寄泊する所とす。豐後の南部は、小半島多く斗出す。佐賀關は、其の東角を地藏岬と云ひ、伊豫の佐田岬と相對して、內海の門口を爲す。佐賀關の西に、別府灣あり。其の北の國東山嘴は、周防灘に向へり。

早鞆崎は、本道の北端、門司港の在る所、赤間ヶ關と相距る事、僅に十餘町に過ぎず。是れより以西、玄界灘に面する岸は、出入甚だ多からざれども、博多の如き良港あり。博多の西なる唐津も、亦良港とす。壹岐、對馬の兩島は、本道の西北海上に在り。兩島の間を對馬海峽と云ふ。

琉球は、薩摩の南西海洋中に在り。大小五十五の群島、點々相連る、之れを沖繩群島及び先島群島の二に分かつ。就中、沖繩島最大にして、宮古、石垣、入表の三島、之れに次ぐ。

五、山嶽。本道には、九州山脈、霧島火山脈、阿蘇火山脈の三山脈、蜿蜒として連亘す。九州山脈は、南北の二派に分かる。南派は、天草諸島より、肥後の西南部に連り、日向の界を過ぎて、豐後に入り、佐賀關に至りて海に注く。此の山脈中に紫尾山(四、七八五)、白髮山、國見山、市房山(六、一三八)、江代山(五、四七八)、祖母嶽(五、六七六)等の高山あり。北派は、五島、平戸の諸島より來り、肥前に連り、國の中央を東北に進み、筑前、豐前を經て、中國山脈に連る。此の山脈中にては、國見嶽、領巾振山、天山、脊振山、寶滿山、福地山等を、重なる峻嶽とす。霧島火山脈は、薩南諸島より來り、大隅、日向の界に入り、海を渡りて島原半島に連る。霧島山は、脈中の主嶽にして、東西二峰あり、西峰は、高さ五千四百七十八尺、東峰は、西峯より稍低し。又開聞嶽(三〇六九)、櫻島嶽、溫泉嶽(四、六九〇)等も、皆此の脈中の高山なり。阿蘇火山脈は、九州山脈二派の間に噴出せるものにて、霧山火山脈の北に接續し、肥

後の東部より豐前、豐後の間に入り、國東半島に至り、海を輸して四國に渡る。　阿蘇山其の主峯にして、高六千二百三十七尺あり。　其の舊火口は、長七里、廣四里、世界に稀なる大火口とす。　今は、其の口内に、五個の火山を噴起したり。　此の外著名なる山嶽は、涌蓋(ワイフタ)山(五、〇七〇)、九重山(六、一五〇)、鶴見山(五、二四〇)、由布山(六、五七〇)、英彦山(三、三六〇)等なり。

本道は、火山多きを以て温泉頗る多し。　殊に肥後、豐後兩國は、到る處、殆ことこれなきはなし。

六、河流。　本道中河流の大なるものは、筑後川、川内川、球摩川、大野川、美々津川、五箇瀨川、一の瀨川、大淀川等なり。　筑後川(三五)は、一に筑紫二郎と稱す。　其の上流は、豐後の日田川にして、豐後、肥後の諸水を合せ筑前、筑後の界に入り、久留米の北を經て、筑紫潟に入る。此の川水量の大なること、本道第一なり。　川内川(四六)は、源を日向の西南隅の山間に發し、大隅薩摩を過ぎて海に入る。　之れを本道第一の長流とす。　球摩川(二四)は、我國三急流の一にして、肥後南部の諸山より發し、西北に走りて八ッ代の海に入る。　大野川(三四)は、豐後の西南なる、諸山の水を集め、東北に流れて別府灣に入る。　美々津、五箇瀨、一瀨、大淀の四川は、共に日向西部の山間より、四川並行して日向灘に入る。　此の他、筑前の遠賀川、肥後の白川、豐前の山國川等、皆大河なり。　山國川の上流に、有名なる耶馬溪の勝地あり。

七、氣候。　九州の氣候は、一般に温暖なり。　されど、西北部は、南、山嶽を負ひ、北、日本海に面するを以て、冬季風雪多くして、氣候寒冷なり。　之れに反して南部なる日向、大隅、薩摩は、積雪甚だ稀にして、琉球は、周歳霜雪を見ず。　即ち那覇の平均温度は、二十一度七分にして、鹿兒島は、十七度、熊本は、十五度八分、福岡は、十四度八分なり。雨量は、南部に多くして、北部に少し。

八、產物。　本道の物產は、石炭を第一とす。　北部及び南部には、到る處、之れを產せざるなし。　就中、三池、高島、唐津、天草等を、著名の產地とす。　此の他、重要なる鑛物は、薩摩、大隅の金にして、其の產額全國第一なり。　銀も亦同所より出づ。

農產物は、米も麥も粟も各地に產すれども、米は、肥後、筑後を最とし、粟は、肥後を第一とす。　琉球、薩摩の甘藷、琉球、大隅の砂糖、肥後、日向の麻、皆產額多き名物なり。　煙草は、何れの國よりも出だせども、薩摩の國分、楫宿は、其の名特に、世に著る。

製造品は、筑前の博多織、豐前の小倉織、薩摩、久留米の絕、大島紬、琉球の芭蕉布、漆器、肥前の有田、薩摩、肥後八代の陶器、豐前、筑後の生蠟、日向の半切紙、薩摩の七島筵等、皆有名の產物なり。

水產は、沿海の地、何れも其の量額甚だ多けれども、五島鯨、肥前烏賊、薩摩鰹節を最も著名とす。　牧畜、亦諸國に多く行はるれども、肥後、

摩、大隅の馬、肥後、肥前、薩摩、大隅の牛は、最も能く世に著る。

第二節　都邑

一、福岡市、及び其の近傍。　福岡市は、福岡、博多二町の總稱にして、博多灣の岸に在り。　那珂川、兩町の中間を流る。　人口五萬八千二百餘、商業頗る繁盛なり。　福岡縣廳此の所にありて、筑前、筑後の二國と、豐前の四郡とを管轄す。　第十二師團の分營あり。　市の東北一里餘に、箱崎の宮あり、應神天皇を祀る。　市の南五里餘に、天滿天神の祠あり。

福岡より南して、筑後に入れば、久留米あり、第十二師團の第二十四旅團を置かる。　其の南なる柳川は、久留米に劣らぬ都會なり。　又其の南の三池は、石炭坑を以て世に著る。

豐前の小倉は、福岡の東北十八里に在り。　人口一萬八千八百餘、繁

昌なる港とす。小倉織を産す。此の處に西部都督部及び第十二師團司令部を設けらる。小倉の東北に門司港あり、赤間關と相對して、海陸の要衝に當る。此の港亦、特別輸出港にして、內外の船舶常に集合す。

二、佐賀市、及び其の近傍。

佐賀は、肥前の東部に在り。人口二萬八千九百餘、繁華の都會なり。佐賀縣廳此の處に在りて、肥前の一市八郡を管轄す。

佐賀の西に方りて、唐津港あり。特別輸出港にして、石炭及び陶器を產す。其の南の半島に名護屋あり、往昔豊太閤が、征韓の本營を置きし所とす。是れより更に南に廻れば、伊萬里灣あり。此の灣に近き伊萬里、及び有田は、陶器の產を以て世に知らる。

三、長崎市、及び其の近傍。

長崎は、肥前の南部、野母崎半島の頭部に在り。開港以還殆ど三百年、五港中最も舊き互市場なり。人口六萬七千四百餘を有す。內外の船舶輻輳して、貿易甚だ繁盛なり。長崎縣廳此の處に在りて、肥前の一市六郡と壹岐、對馬の二國とを管轄す。長崎港の入口は、小島多く散在す。就中、高島は、石炭坑を以て名を知らる。其の東の島原半島には、島原及び口津の二港あり。口津は、特別輸出港なり。

長崎の北方鯛浦の口に佐世保あり、海軍鎭守府の在る所とす。其の他、諫早、大村、平戸、福江等皆名邑なり。大村に、第六師團の第二十三旅團を置かる。

壹岐の勝本、對馬の嚴原等、亦碇泊に便にして、稍繁華なり。

四、熊本市、及び其の近傍。

熊本は、肥後の西北部白川の岸に在り。人口七萬一千餘、九州第一の都會なり。熊本城は、加藤清正の築造に係り、今は、第六師團の司令部となる。熊本縣廳亦、此の處に在りて、肥後一國を管轄す。

熊本の南宇土半島に、三角港あり、特別輸出港とす。港は、規模甚だ大ならざれども、稍、大船を入るゝに足る。八代、隈府、山鹿等、皆熊本に近き小都會とす。

五、鹿兒島市、及び其の近傍。　鹿兒島は、薩摩鹿兒島灣の西岸に臨み、人口五千四百餘、船舶出入多く、市況繁盛なり。鹿兒島縣廳此の處に在りて、薩摩、大隅二國を管轄す。

鹿兒島の近傍は、南に谷山、加世田、楫宿、山川の名邑あり。北に川内、阿久根、宮之城の小都會あり。加治木、垂水、國分等は、大隅國の都會なり。

六、宮崎町、及び其の近傍。　宮崎町は、日向國大淀川の口に在り、人口九千餘を有す。宮崎縣廳ありて、日向一國を管轄す。

宮崎の西南大隅に接して都城あり。小繁華の都邑にして、人口一萬二千六百餘を有す。延岡、高鍋、肥飫等も亦、名邑とす。細島は、北

部に在る要港なり。

此の地方は、天孫降臨以來、神武天皇に至る迄、皇居の在りし地なれば、所々に其の遺跡多し。

七、大分町、及び其の近傍。　豐後の大分は、別府灣に臨む。人口一萬一千三百餘、繁華の地なり。大分縣廳ありて、豐後一國と、豐前の二郡とを管轄す。

大分の北に、別府の温泉あり、浴客多し。又、其の北に、日出、杵築等の名邑あり。而して又南には、臼杵、佐伯等の名邑あり。其の西には、竹田あり。皆小都會とす。中津は、豐前に屬す。人口一萬三千六百餘、小繁華の市街なり。其の東の宇佐に、宇佐八幡宮あり、和氣清麿の神勅を受けし所とす。

八、那覇、及び其の近傍。　琉球の那覇は、沖繩島の西岸に在る港にして、人口三萬三千餘を有す。沖繩縣廳ありて、琉球諸島を管轄す。

那覇の東一里に首里あり、舊琉球王の城地にして、人口二萬五千餘を有す。第六師團の分營あり。沖繩島の西北岸に運天港あり、大船を舶すべし。此の他、座間、味島の安護港西表島の船浮港は、共に良港なり。

琉球群島は、遠く南海に散在するが故に、島人の言語、風俗皆、他の地方に稍異なる所あれども、北海道のアイノ人、又臺灣の蕃民の如き別種の者にあらず。

第九章　北海道

第一節　總說

一、位置、廣袤、人口。 北海道は、蝦夷島と、千島群島とより成る。蝦夷島は、津輕海峽を隔てゝ本州と相對し、東南は、太平洋に臨み、西北は、日本海及びオホーツク海に瀕す。千島群島は、蝦夷島の東端より北東に列りて、太平洋と、オホーツク海との分界を劃し、其の最北端は、久留里海峽を隔てゝ、甘察加と相望む。面積六千九十五方里、人口四十二萬三千二百二十八人、即ち一方里につき、六十九人の割合にして、全國中、人煙最も稀少なる地方とす。

二、區劃。 本道は、渡島、後志、石狩、天鹽、北見、膽振、日高、十勝、釧路、根室、千嶋の十一國に分れ、更に又二區八十八郡に分かる。北海道廳之れを管轄す。

三、地勢。 蝦夷島は、其の地形、恰も赤鱈の尾を掉るが如し。山脈は、南北に走れる蝦夷山脈と、東西に亘れる千島火山脈と、十字形を爲し、其の交叉點、地勢最も高峻なり。其の間所々に平野あり、大小の河流これに灌漑す。内地は、未開の土地多く、人跡未だ到らざる所少からざれど、地味概ね肥沃にして、耕地にも、牧場にも、適すべしといふ。

四、海岸。　海岸は、四邊共に屈曲多からず。蝦夷島は、北に宗谷岬あり、宗谷海峽を隔てゝ、樺太と相距ること僅に十餘里。東に知床（シレトコ）、納紗布（シヤブ）の兩岬あり、根室海峽を隔てゝ、千島の國後島と相對す。其の間を根室灣といふ。納紗布岬を南に廻りて、釧路の海岸に出づれば、厚岸灣あり。更に南すれば、襟裳岬に出づ。其の西南に繪鞆岬あり。これを廻れば、渡島半島にして、本州の青森灣と相對す。半島の東西端に惠山岬と、白神岬とあり。兩岬の間を函館灣とし、半島と繪鞆岬との間を火山灣とす。又、西の方日本海に面して、白絲岬あり。其の北を神成、積丹の兩岬とす。積丹岬の東は、小樽灣にして、遙に雄冬岬と相望む。此の岬より北は、殆と一直線にして、宗谷岬に至るまで屈曲なし。

千島群島は、根室海峽より、其の北端の占守島に至るまで、凡そ三百餘里の海上に列る。就中、國後、擇捉、得撫、幌筵の四島を最大なりとす。

五、山脈。　蝦夷島にては、蝦夷山脈に、宗谷嶽、千登、蟹牛嶽、神成嶽（五、四〇〇）、獵虎嶽（四、六八〇）等ありて、千島火山脈に、斜里嶽（五、四〇〇）、雌雄阿寒嶽（雌嶽四、七九〇）、ヌタプカウシベ嶽（七、五〇〇）、十勝嶽（七、〇〇〇）、石狩嶽及び樽前嶽、余市嶽、有珠嶽（三、三四〇）、遊樂部嶽（五、一〇〇）、駒嶽（三、六二〇）、惠山等あり。就中、ヌタプカウシベ嶽は、本島第一の高島にして、山勢雄峻なり。千島群島にては、阿瀨度島にアライト嶽（七、一〇〇）、國後島に茶々嶽（七、四〇〇）、幌筵島にフス峯（六、九〇〇）等あり。

六、河流、湖沼。　石狩川（一六七）は、本邦第一の巨流なり。其の源を石狩、十勝兩嶽の間より發し、石狩平源に出で、雨龍川、室知川を合せて、益廣大となり、南流して千歳川に合し、遂に日本海に入る。河幅四百間餘、鮭漁甚だ盛なり。石狩川に次ぐは、天鹽川（七〇）にして、其の源は、石狩、十勝兩嶽の北に發し、天鹽の東北部を北流して、日本海

に入る。十勝川(五〇)は、大津川とも云ふ。十勝の西北諸山より發する諸川を合し、十勝平源を回流して、大平洋に注ぐ。久壽里川は、釧路の北境なる釧路湖より發し、國中の諸水を集め、其の下流に至り、更に阿寒川を合せて、釧路港に注ぐ。此の外、後志の後志川、北見の常吉川、湧別川等は、皆有名の大河にして、國中の灌漑を爲せしこと尠からず。

湖沼は、北見の猿間湖(周四十八里)を最大とし、根室の楓蓮湖(十五里)、之れに次ぐ。其の他、膽振の洞爺湖、支笏湖、十勝の喜門沼、北見の網走沼等、皆有名なり。

鑛泉は、全道六十餘あり。就中、著名なるは、渡島の惠山湯、河汲湯、後志の雷電湯、膽振の登別湯等なり。

七、氣候。 本道の氣候は、一般に寒冷なりと雖、千島帶火山脈より南方太平洋に面する部分は、寒氣稍弱くして、積雪亦甚だ深からず。

ヲチコーツク海、及び日本海に瀕する部分は、寒冷なる潮流あるが故に、冬時は、寒威甚だしくして、氷雪は、毎年十月より翌年の四月迄の間、全く融解することなく、草木これが爲めに、枯凋するに至るといふ。一年の平均温度は、札幌六度四分、函館八度一分、根室五度四分、釧路四度七分なり。本道の寒氣は、人生堪へ難き程にはあらず。

雨量は、甚だ少くして、略、瀬戸内海岸に等しと雖、或は、是れより少き所あり。札幌、網走等、是れなり。殊に網走は、全國中、雨量最も少き所とす。

八、物産。 本道は、土地未だ開けざれは、製造品に乏しと雖、天産物は、頗る豐饒にして、殊に海産の如きは、鮭、鱒、鯡、鰯、鱈、昆布の類より、膃肭獸、獵虎、鯨等の海獸に至る迄、其の産額の多きこと、全國中及ぶ所なし。

又、農産物は、豆、麥、馬鈴薯、蕎麥、藍、麻、粟、果實等多く、米作、養蠶も、亦漸く

開けつゝあり。鑛物は、石炭、硫黄最も多くして、夕張、幌内、幾春別、空知、岩内等には、廣大なる炭坑あり。跡佐登より出づる硫黄は、其の産額全面に冠たり。遊樂部の銀山亦著名なり。

牧畜は、未だ甚だ盛ならざれども、近年漸く繁殖の勢あり。現に、牛馬の數六萬餘頭に及ぶと云ふ。加之、到る處森林に富みて、椴松、蝦夷松、赤楊等の産多し。本道は、我國の一大富源と稱すべし。

第二節　都邑

一、札幌區、及び其の近傍。 札幌區は、石狩平原の西南隅に在り。人口二萬八千餘、市街甚だ繁盛なり。北海道廳在りて、北海道を總轄し、其の下に十九支廳あり。第七師團司令部、亦此の所に在り。「札幌の西なる小樽は、小樽灣に臨める特別輸出港なり。人口三萬九千六百餘、函館に次げる都會なり。小樽港より札幌を經て、北は空知、幌内の炭山に、南は、室蘭に達する鐵道なり。後志の壽都は、壽都灣に臨める小繁華の地なり。天鹽の增毛、留萌、苫前等も、亦名邑とす。

二、函館區、及び其の近傍。 函館區は、渡島國に在りて函館灣に臨み、人口六萬六千三百餘を有す。五港の一にして、本道第一の都會なり。港内水深くして、船舶の出入絶えず。函館の西に、福山、江差の兩港あり。福山は、人口一萬餘、江差は、一萬五千あり。共に繁華の港とす。

室蘭は、襟裳岬の北に在る特別輸出港にして、海軍鎭守府の豫定地なり。室蘭の東、膽振、日高の海岸に、苫小牧、浦河、幌泉等の小邑あり。

三、根室、及び其の近傍。 根室は、根室灣の南岸に在る要港にして、人口一萬六千餘、繁華の地なり。第七師團の第十四旅團を置かる。根室の南には、釧路に厚岸、釧路の兩港、北見に網走、斜里等の名

邑あり。釧路は特別輸出港なり。

千島群島は、總べて、人烟稀疎にして、都邑と稱すべきものなし。唯、擇捉島の紗那を、舟泊の所と爲すのみ。

元來、本道には、蝦夷人一にアイノ人と稱する一種の住民あり。其の言語、風俗、全く吾等と異にして、茅草を覆へる矮屋に栖み、樹皮を織りて衣とし、獸魚を捕りて食となせり。されど、今は、吾等と同じき內地人多く、此の地に移住して、彼等を使役するもの多ければ、彼等も自ら其の風に化せられて、遂には開明の民となるべし。

第十章　臺灣

第一節　總說

一、位置、廣袤、人口。 臺灣は、琉球與那國島の西南、大約百餘里の海上に在る大島なり。西は、臺灣海峽を隔てゝ支那と相對し、南は、バシイ海峽を隔てゝ、西班牙領のフィリッピン群島と相對す。南北の長百里餘、東西廣き處三十里餘、面積は、屬島を合せて、二千五百十四方里、人口は、大約三百萬あり。澎湖列島、江頭嶼、火燒嶼等これに屬す。澎湖列島は、大小五十餘の島嶼より成る。

二、地勢。 本島の地形は、中部最も廣く、南北に至るに從ひて、漸く狹し。山脈は、稍、東部に偏して、南北に連亘し、自ら地勢を東西の二部に分かつ、其の中部より南は、最も高峻にして、一萬尺以上の高峯あり。河流は、此れ等山嶽の間より發して、東西に注下す。山脈以西の地は、丘陵起伏せりと雖、概ね、廣濶の平原にして、以東は、山岳重疊し、地面の傾斜甚だしければ、平地鮮し。

三、區劃。 臺灣は、我版圖に歸せしより、日尙ほ淺きを以て、行政區劃は將來、變更を要するものあるべしと雖、現今の制度によれば、臺北に、臺灣總督府あり、其の下に臺北、臺中、臺南、新竹、嘉義、鳳山の六縣

と、宜蘭、彰化、臺東、澎湖の四廳を置きて、全島を分轄す。

四、海岸。 海岸は、屈曲甚だ少し。西岸は、概ね、沙濱にして、東岸は、斷崖多し。島の北部にては、三貂角、北斗岬、東方に斗出し、其の西に基隆灣あり。是れより西、富貴角を廻れば、淡水灣あり。又、西岸に平安、打狗等の港灣ありと雖、共に大船を入るゝに足らず。島の南端なる、南岬と、南西岬との間に南灣あり。東岸は、港灣の記すべきものなし。澎湖列島には、馬公と稱する一港灣あり。

五、山脈。 本島の山脈は、中央部より南部に於て、南北に走るものを、玉山山脈といふ。北部は、山脈錯綜して、或は、高原となり、或は、火山となる。玉山山脈中の主峯を新高山(一二、八五〇)といふ。我國第一の高山なり。シルヴィア山(一一、三〇〇)は、又頭圍山と稱し、北部の高峰とす、傀儡山は、鳳山の東方にあり、亦世に知らる。其の南には、卑南山あり。又、分水山、分水崙等の高峯あり。火山脈は、九州

霧島帶火山脈と連通せるものゝ如し。大屯山、及び紗帽山等は、火山性の山嶽なり。全島溫泉に富む。

六、河流。 河流は、皆、山脈の間より發して、東西の海に入る。大河長流の運輸に便なるもの鮮し。淡水溪は、島中の最大なる河流なり、延長三十里餘、淡水港に注ぐ。此の他、大肚溪、濁水溪、笨港溪等、皆著名なり。

湖沼は、山間處々にあり。其の大なるを龍湖、又、水社湖といふ。南北一里餘、東西半里あり。其の他、大屯山湖、赤山池等あり。

七、氣候。 本島の南部は、熱帶に屬するが故に、氣候甚だ炎熱にして、冬季と雖、僅に高山の頂上に雪を戴くのみ。然れども、夏時は、却て諸山より冷風吹き下りて、炎熱を拂へるが故に、人の健康を害する程には至らず。降雨は、春季少くして、秋冬の候に多し。溫度は、夏時に二十九度より三十度、冬時には、十度内外を通例とす。され

ば、人の生活に困難なるは、唯、一日の間、屢、温度の激變あることのみ。」

八、物産。　本島は、農産多し。　米と甘蔗とは、一年二回の收穫あり。茶、麥、玉蜀、蕎麥、玉蜀黍、大豆、胡麻、藍、綿、落花生、野菜、煙草の類亦多し。然れども、本島には、最も著名なる産物は、茶と砂糖にして、砂糖は、臺南地方、茶は、臺北地方の特産とす。　材木には、松、杉、樟、楓、梹榔、棕櫚、榕樹の類を出だし、果物は、桃、李、蜜柑、橙、無花果等の屬を産す。動物には、水牛、騾馬、豚、鷄等の家畜あり。　鹿、熊、豹、猿、狼、野猪、山猫、兎等の野獸あり。　鳥類は、鷓鴣、鳩、鴨、鶉等にして、魚類は、鰹、鱸、鯖の類あり。」鑛物類は、其の種類少けれども、硫黄と石炭とは、其の産額頗る多し。」

第二節　都邑

一、臺北府、及び其の近傍。

臺北府は、臺灣北部の都會にして、臺灣總督府、及び臺北縣廳の在る所なり。四面山を繞らして、南に淡

河流る。　市街を、城内、城外の二に分つ。　城内は、周圍に城壁を設け、城外は、南にあるを、艋舺といひ、北にあるを、大稻埕といふ。　全府の戸數二萬餘、人口十五萬あり。　家屋は、支那風と、西洋風との建築多し。

臺北の東九里餘に、基隆港あり。　北海に面する良港なり。　人口一萬餘、貿易場たり。　海底電線は、此の地より發し、沖繩諸島を經て九州に至る。　鐵道は、此の港より臺北を經て新竹に達す。　淡水港は、臺北の北六里にありて、亦、良港とす。　人口七千餘、商業繁盛なり。此の所より、支那の福州に達する、海底電線あり。

淡水港の南に新竹あり。　人口四千餘、土地肥沃にして、産物多し。新竹縣廳を置く。

臺北の東南に、宜蘭あり。　人口六千、東海岸に臨める市街なり。　宜蘭廳を置く。

二、臺灣府、及び其の近傍。　臺灣府は、全島の中央にあり、大肚溪、其の北を流る。此の府は、新設以來、日尚ほ淺きを以て、市街の規模宏大なるも、未だ繁盛に至らず。臺中縣廳こゝにあり。大肛溪の下流に、彰化と、鹿港とあり。彰化は、人口二萬を有す。近傍の土地肥沃にして、耕作に適せり。彰化廳此の處に在り。六斗門は、臺灣府の南、濁水溪の上流に在り、人口二萬あり。此の他、雲林、苗栗、埔里社等の都邑あり。雲林に支廳を置く。

三、臺南府、及び其の近傍。　臺南は、舊と總督府のありし所にして、島中第一の大都會なり。市街は、西方、海に面して、安平港(人口一萬五千)を控へ、人口十三萬五千、商業繁盛の地なり。臺南縣此の處に在り。打狗は、臺南の南に在る要港なり。是れより、澎湖島に達する、海底電線あり。此の他、鳳山、嘉義、恒春等の都邑あり。恒春は、本島最南の都邑にして、小繁華の地なり。鳳山と、嘉義とには、各縣廳あり。澎湖列島は、大小五十五島ありて、其の中、稍、大なるを澎湖島、白砂島、漁翁島の三島とす。此の三島の間に在る馬公港は、臺灣第一の良港にして、大艦數十艘を繫ぐに足る。澎湖廳の所在地なり。

四、臺東州、及び其の近傍。　臺東州は、山脈の東部に位する都邑にして、秀枯欒溪の上流にあり。臺東縣廳を置かる。卑南は、恒春の北方、凡そ、三十五里の所にあり。鳳山よりの通路ありて、頗る繁華なり。

第四篇　人文地理

第一章　人口

我國の人口は、四大島及び屬島を通算して、四千百八十一萬三千二百十五人あり。(明治廿七年末調)。之に、臺灣の人口、大約三百萬を合算すれ

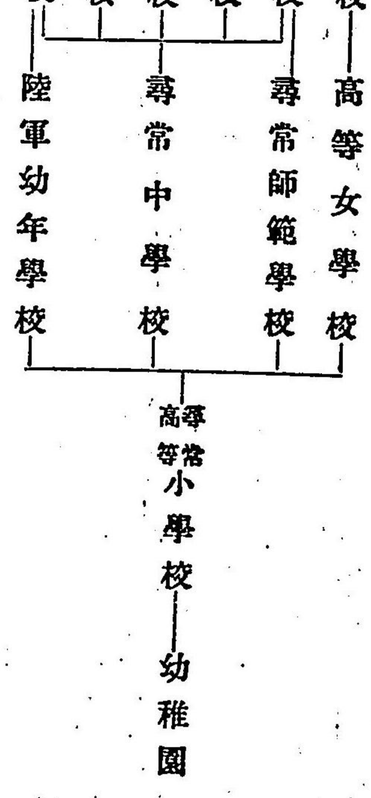
ば、全國の人口大約四千四百八十一萬三千二百十五人ありとす。之れを全國の面積、二萬七千三百〇八方里に配當すれば、一方里につきて、一千五百三十七强を得べし。此の如く、人口の稠密なるは、之れを世界各國に比較するに、只だ白耳義、和蘭、及び英吉利本國あるのみにして、其の他は、皆、我れに及ばず。

今、國中人口の最も稠密なるは、東京を中心とせる、關東平野にして、次ぎは、畿内平野、次ぎは、濃尾平野、讃岐の高松地方なり。又、其の稀少なるは、北海道にして、次ぎを本州の東北地方とす。

國民を分ちて華、士族、平民の三階級とす。各階級の人口を概算すれば、平民三千九百七十六萬九千七百四十人、士族二百〇三萬九千五百九十一人、華族三千八百八十四人なり。（明治廿七年末調査）

第二章　教育

我國の教育は、古より能く行はれて、忠孝仁義の道を始め、文學武藝一つとして、夙に發達せざるものなし。殊に明治維新以後、全國に、大中小の學校を起して、普く國民の子弟を、就學せしむることゝせられしかば、文運益、隆盛にして、僻陬貧賤の子弟も、亦文字を解するに至れり。今、諸學校の種類及び連絡に就きて、概要を示すこと、左圖の如し。



第三章　宗教

現今、我國に行はるゝ宗教は、神道、佛教及び基督教の三種あり。就中、最も盛なるを佛教とす。

神道。神道は、日本固有の宗教にして、現今十派あり。人民は、古來の習慣によりて、佛教と並び信ずれども、眞に宗教と稱し難き點なきにあらず。之れに屬する神社、大約十九萬一千餘あり。

佛教。佛教は、印度に起り、支那、及び朝鮮を經て、我國に傳來せる宗教なり。其の宗派には、天台、眞言、眞宗、臨濟、黃檗、曹洞、日蓮、法相、華嚴、時宗、融通念佛、淨土あり。之れに屬する寺院、七萬一千餘あり。

基督教。基督教は、歐米諸國に行はるゝ宗教にして、我國に傳來してより、年未だ久しからず。且つ德川氏の頃、禁制せしことなどあれば、未だ甚だ盛ならず。其の宗派には、新教、舊教、希臘教の三種あり。全國會堂の數、八百餘あり。

第四章　氣質

國民、は、氣質優美にして、思慮深く、學術を好みて、技藝に堪能なり。殊に勇敢の氣慨ありて、忠君愛國の志氣に富み、一旦事あるに當りては、一身一家を忘れて、公事に從ふことは、他邦人の遠く及ぶ能はざる所なるべし。たゞ他邦人の我を評して、規模狹小にして、遠大雄偉の氣象に乏しと云ふは、大に省慮すべき所ならんか。

國民の氣質は、地方によりて、多少の差異あるを免れず。今之れを概言すれば、東北人は、朴直に、關東人は、義俠に、京阪人は、優雅に、中國人は、溫順に、四國人は、篤實に、九州人は、剛直なり。然れども、又之れに伴へる、偏僻なきにあらざれば、各、其の長を進めて、其の短を改めんことを心懸くべし。此の他、北海道の土人は、從順なれども、臺灣土人は、慓悍にして、爭鬪を事とするものありと云ふ。

第五章　風俗

我國の風俗には、古來一種の特有ありて、衣食住より、座作進退に至るまで、大に外國と異るものあり。されば、一般に素朴を好みて、自然を愛し、曾て、修飾を誇示することなし。

飲食。食物は、米、麥、野菜を常食とす。されども、都鄙によりて、其の差異少からず。都會は、肉を食ふこと、漸く盛になれりと雖、僻邑は尙ほ粟、稗、蔬菜、玉蜀黍、甘薯の類を食す。

家屋。家屋は、土地の情況と、貧富とによりて、差異ありと雖、一般に木造にして、瓦葺、板葺なり。近來石造、煉瓦造、塗家の類漸く增加す。又城樓、殿堂の類は、一種築造法ありて、其の觀甚だ、壯麗なり。

衣服。衣服には、和洋の二種ありり。然れども、寬濶の和服を用ふるものゝ多きは、自ら國土の氣候に適すればなるべし。禮服には、一定の制ありて、其の種類多し。

第六章　農業

我國は、氣候溫暖にして、地味肥沃なれば、農業夙に發達して、農民の數、全國三分の二を占む。然るに、近來、農學校、試作場、共進會等を起して、其の改良の途を謀るを以て、斯業益、發達せり。全國耕地の反別は、

田二、七九八、三二八町、　畑、二、二八二、六七六町、

合計五百八萬町餘にして、主要の農產物を米、麥、豆、粟、甘蔗、綿、煙草、藍、麻、茶、蠶糸等とす。就中、米、麥、茶、蠶糸の如きは、外國に輸出することは甚だ多し。

第七章　鑛業

我國の鑛業は、昔日に於て甚だ微々たりしが、近年に至り、採鑛の方

法大に進歩して、斯業頗る發達せり。其の産出する鑛物は、種類甚だ多くして、殆ど絶無の物なし。是れ實に地質複雜なるに由るなるべし。主要なる鑛物は、金、銀、銅、鐵、鉛、安質母尼、滿俺、硫黄、石炭、石油等とり。

石炭は、我國鑛産中の主位に居るものにして、産額は、歐米の石炭國には、及ばずと雖、亞細亞洲中に於て、劣る所なし。此の産地は、九洲八分を占め、北海道は、一分を占む。

銅は、石炭に次げる産額あり。其の産地は、足尾(下野)別子(伊豫)を最とし、阿仁(羽後)、荒川(羽後)、尾去澤(陸中)を、其の次とす。之れを世界の銅山國に比すれば、北米合衆國、西班牙の次に位するものなり。

其の産地は、北海道にて、全國の産額の八分餘を出だす。

其の他の鑛産中、滿俺、安質母尼は、世界中佛國に次ぎて、第二位を占めたり。又、金、銀、鐵、鉛、石油の類より、水晶、大理石、花崗石等、石材の類

に至るまで、其の産出何れも少からず。

製鐵の業は、最も必要にして、國家の開明は、これに由ること、多しといふと雖、從來は其の需用の八分を、外國の輸入によりて、供給したりしが、近年其の産出、次第に增加しつゝあるは、甚だ喜ぶべし。

第八章　工業

我國民は、意匠に富み、手工に巧なるを以て、古來積巧なる製作品鮮からず。之れを海外に輸出するは、近年の事なりと雖、工業は、國民の生業中、最も進歩の勢あり。現今、諸職工の數は、大約四十三萬人にして、其の製作品の主要なるものは、織物、陶器、磁器、紙類、綿糸、酒類、醬油、摺附木、疊表とす。

織物の中、絹織は、京都、桐生、福井、足利等を最とす。就中、京都の西陣織は、精巧を以て、其の名夙に海外に聞ゆ。木綿織は、愛知、和歌山、愛

媛を第一とし、大阪、奈良、埼玉等、之れに次ぐ。

酒類は、其の産額と品質とに於て、池田、伊丹(攝津)を最とし、愛知、福岡、長野之れに次ぐ。又、近年大に増加せる麥酒は、東京、大阪等にて多く、之れを釀造す。

陶器、磁器は、京都、愛知、石川、佐賀を最とし。之れに次ぐを、靜岡、岐阜、鹿兒島等とす。

綿糸は、東京、大阪をはじめ、愛知、岡山、京都にて製出するもの多し。

紙類は、日本紙に於ては、其の産額の最も多きを高知とし、岐阜、靜岡、愛知等之れに次ぐ。又、洋紙類は、東京、福岡、三重、兵庫、靜岡等より産すること多し。

摺附木も、近年、大に、其の産額を増加せり。兵庫、多く之れを出だし、大阪、東京、愛知之れに次ぐ。

第九章　林産

我國の山林は、其の反別一四、七三〇、〇〇〇町ありて、何れも皆、良材佳木に富めり。其の著名なるものは、陸奥、羽後、兩野、木曾、越中、伊豆、駿河、遠江、伊勢、大和、日向等の山林にして、各、特有の良材あり。就中、松、杉、檜、欅、樅、樟等、最も多し。

山林は、國土の風景を形成するに、必要なるのみならず、是れに因りて、氣候の變化を、調和するものなれば、其の保護法、近年漸く整ふに至れり。

第十章　牧畜

牧畜の業は、未だ十分に發達せざれば、其の産出も、亦多からず。されども、馬は、奥羽、北海道、及び九州に多く、牛は、中國、四國、九州に多し。豚は、其の數、甚だ多からざれども、琉球、鹿兒島、千葉、長崎、宮崎等に稍、

多く、鷄は、農家の餘業に飼養するものなれば、著名なる産地なし。此の他、綿羊、山羊の類、全く無きにあらざれども、其の數記するに足るものなし。

第十一章　水産

我國は、河川湖海の水産物に富んで、魚介、苔藻の産出、鮮少ならず。加ふるに、近年は、魚類の蕃息法漸く進歩せるを以て、斯業は久しからずして、國家の大富源となるに至るべし。水産及び其の製造品中、多額なるものは、鰹節、鰮、鰯、鮭、鯖、海羅、昆布、荒布、和布、魚油、搾滓、食鹽等なり。此の他、鯨、臘虎、膃肭獸を、重要の水産物とす。

第十二章　商業

商業は、生産と、交通とに伴ひて、進歩する者にして、近年大に其の隆盛を致せるは、即ち、生産、交通の進歩せるものに、よれるものとす。

内國商業。内國商業の盛なる地は、東京、大阪、名古屋を最とし、京都、德島、堺、仙臺、甲府、廣島等を其の次とす。是れ等の地、皆、其の近傍に、生産地を控へたる上に、交通の便悉く備りて、貨物の集散必らず、茲に藉らざるべからざれば、自から賣買の中樞となりて、遂に繁盛の市街となれるなり。

外國貿易。外國貿易は、横濱、神戸、大阪、長崎、函館、新潟の六港を始めとして、其の他、特別輸出港十餘ヶ所ありて、盛に行はる。明治廿七年輸出入總價格は、

輸出品總價額　一億千三百二十四萬六千八十六圓、

輸入品總價額　一億千七百四十八萬千九百五十六圓、

輸入品の重要なるものは、兵器、及び機器、穀物、飲食物、布帛、糸類、砂糖、金屬類、染料、彩料、油、蠟、雜貨類にして、輸出品の重要なるものは、生絲、

眞綿、穀物、飲食物、布帛、衣裳類、茶、金屬類、藥料、染料、油、蠟、雜貨類等なり。」輸出は、北米合衆國に最も多く、香港、支那、佛蘭西、英吉利、印度、濠洲、加奈陀、伊太利等、之れに次ぎ、輸入は、英吉利を第一とし、支那、印度、香港、獨逸、北米合衆國、佛蘭西等を、其の次ぎとす。

第十三章　交通

交通は、國の開明に關すること、最大なれば、維新以還、大にこれが改良を圖りて、今は、畧、不便なきに至れり。交通の機關は、道路、船舶、鐵道、郵便、電信、電話等、是れなり。

道路。 道路には、國道、縣道、里道ありて、都會より村落に至るまで、概ね、車馬を通ずるを得べし。全國中主要なる道路は、東海道、中山道、奥羽街道、北陸街道、山陰街道、山陽街道、四國街道、九州街道、蝦夷島、南海岸道、同北海岸道、臺灣西部海岸道等、是れなり。

船舶。 我國は、海國なるを以て、船舶の通路、自然に具備せるの便利あり。海岸線大約、七千五百里の航路湖沼、河流の渡船、之れを河海なき國に比すれば、其の便利如何にぞや、而して近來航海の業、益、勃興に赴く者あり。

鐵道。 鐵道は、明治五年、始めて、東京、横濱間に創設せられし以來、之れを設くること、各地方に流行して、今は、其の延長、二千五百哩以上に達し、尚ほ工事中の線路も甚だ多し。此の他、電氣鐵道、馬車鐵道、等あれども、未だ甚だ盛ならず。

郵便。 郵便は、明治四年の創設にして、爾來、大に、整備し、都邑に郵便局の設なきはなく、村落と雖、亦、郵便函の備へあらざるは無し。信書の集合、配達、時を期して誤らず。千里の要務、數日を出でずして、處辨することを得。

電信、電話。 電信は、明治二年に創設し、電話は、同十八年に開始せら

る。電信は概ね、全國の都邑に通ずるのみならず、外國線にも亦、連絡するもの鮮からず。電話は、今日は、唯、東京、大阪、京都、横濱、神戸のみに行はる。されど、今、尚ほ設計中のもの等あれば、亦久しからずして、樞要の都邑に行るゝに至るべし。

第十四章　政治、外交

我國は、萬世一系の皇室を奉戴する、立憲君主國にして、天皇陛下、親ら立法、行政、司法の三大權を總攬し給ふ。

立法部。立法部は、帝國議會にして、貴族院、衆議院より成る。貴族院議員は、皇族、華族、及び國家に勳功あり、或は、學識ある、勅撰議員、各府縣多額納稅者にして、其の數約三百人とす。衆議院議員は、直稅十五圓以上を納むる公民中より撰出せる者にして、其の數亦三百人なり。議會は、毎年、詔勅を以て召集し給ふ。

行政部。行政部は、内閣及び、外務、大藏、陸軍、海軍、司法、文部、農商務、遞信の九省より成る。内閣總理大臣、及び各省大臣ありて、諸政を掌る。九省の外に宮内省あり。其の大臣は、皇室の事務を掌りて、國政に干らず。此の他、樞密院ありて、天皇陛下の顧問となり、會計檢査院ありて、諸官廳の會計を監督す。

司法部。司法部は、大審院、控訴院、地方裁判所、及び、區裁判所より成る。大審院を最高法衙とす。控訴院は、東京、大阪、名古屋、廣島、長崎、仙臺、函館に、各、一個所を置き、地方裁判所は、北海道廳に三個所、各府縣に各一個所を置く。區裁判所は、其の下に屬して、全國に三百個所あり。

地方廳。地方廳は、一廳、三府、四十三縣あり。其の下に、郡、區、市、町、村役所を置く。各府縣に、府縣會、郡、區、市、町、村に、郡、區、市、町、村會あり。

臺灣には、臺灣總督府ありて、全島の政務及び軍務を總管す。

外交。現今、我國と條約を締結せるは、朝鮮、支那、暹羅、英吉利、佛蘭西、獨逸、露西亞、墺太利、伊太利、西班牙、葡萄牙、瑞典、那威、白耳義、和蘭、嗹馬、瑞西、北米合衆國、墨西古、智利、秘魯、布哇の二十一國なり。各條約國は、互に公使を派遣して、兩國の交際、及び其の他の要務を掌らしめ、又、貿易場には、領事を置きて、商業及び其の他の事務に當らしむ。

第十五章　軍備

我國の陸海軍は、天皇陛下の、大元帥となりて統率し給ふ所なり。

全國皆兵の制なれば、國民は、滿十七歳より四十歳まで、兵役に服する義務あり。兵役は、常備、後備、國民の三種とし。更に、常備を現役、豫備の兩役とす。

陸軍は全國を十二師管に分かち、各師管に、一師團の兵を置き、又、一師管を二旅管に分かち、各旅管に、一旅團の兵を置く。而して一旅

管は、二聯隊區と爲して、各聯隊區に、聯隊區司令部を設く。又、小笠原島、佐渡、隱岐、大島、沖繩、五島、對馬の各島に、警備隊區を置き、其の他の要地に、要塞砲兵隊、憲兵隊を設けて、不虞に備ふ。師管の配置左の如し。

東部都督部（東京）	近衛師團（東京）	近衛第一旅團（東京）	近衛第二旅團（東京）
	第一師團（東京）	第一旅團（東京）	第二旅團（佐倉）
	第二師團（仙臺）	第三旅團（仙臺）	第十五旅團（新發田）
	第七師團（札幌）	第十三旅團（札幌）	第十四旅團（根室）
	第八師團（弘前）	第四旅團（弘前）	第十六旅團（秋田）
中部都督部（大阪）	第三師團（名古屋）	第五旅團（名古屋）	第十七旅團（豐橋）
	第四師團（大阪）	第七旅團（大阪）	第十九旅團（伏見）
	第九師團（金澤）	第六旅團（金澤）	第十八旅團（敦賀）
	第十師團（路姫）	第八旅團（姫路）	第二十旅團（福知山）

西部都督部（小倉）		
第五師團（廣島）	第九旅團（廣嶋）	第二十一旅團（山口）
第六師團（熊本）	第十一旅團（熊本）	第二十三旅團（大村）
第十一師團（丸龜）	第二十二旅團（丸龜）	第十旅團（松山）
第十二師團（小倉）	第十二旅團（小倉）	第二十四旅團（久留米）

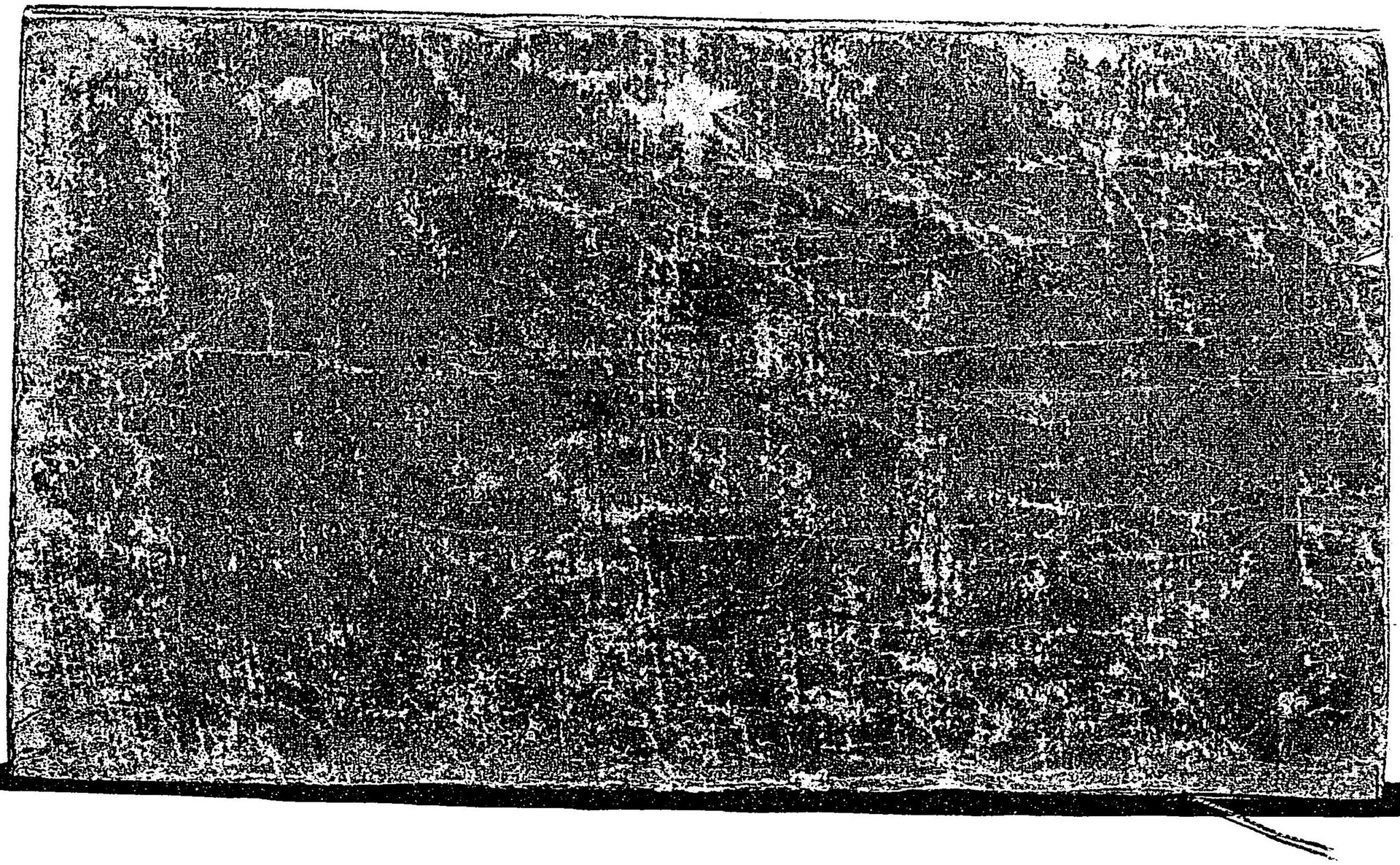
海軍。海軍は、全國の海岸及び海面を五區に分かち、各區に、鎭守府を置く。其の所在地は、即ち軍港にして、軍艦の繫留所なり。鎭守府には、海兵團を置きて、軍艦乘組員の屯在所とす。

第一海軍鎭守府、（横須賀）第二海軍鎭守府、（吳）
第三海軍鎭守府、（佐世保）第四海軍鎭守府、（舞鶴）
第五海軍鎭守府、（室蘭）

中學教程 **日本地理** 終

明治三十一年一月三十一日印刷
明治三十一年二月　五　日發行

定價 本文 金三十五錢
定價 附圖 金二十錢

著作者兼發行者　東京市本所區緣町三丁目廿八番地　中等學科教授法研究會
右代表者　東京市本所區緣町三丁目廿八番地　間伸正修
印刷者　東京市京橋區築地三丁目十五番地　根岸高光
發賣者　東京市日本橋區通油町十八番地　水野慶二郎
發賣者　東京市日本橋區本石町三丁目廿三番地　金昌堂　杉山辰之助
關西發賣者　大阪市東區備後町四丁目　石井書店
印刷所　東京市京橋區築地三丁目十五番地　帝國印刷株式會社

版權所有